新式圍碁寶典

第四

漢

202
437

202-437
1200901407772

新式圍碁寶典 第四

目次

戰爭之部

○切……自一圖至六圖……一
○盤……自三圖至五圖……一〇
○點(死の點)……自九圖至十一圖……一四
○活……自九圖至十圖……二〇
○二十目の實戰……自二十五圖至二十七圖……二四
○練習問題(攻合)……自十三圖至十六圖……三二
○解答(攻合)……自十三圖至十六圖……三七
○持……自一圖至三圖……四四

布石之部

○地と駄目……自一圖至三圖……四九

大正 6. 6. 14 購求

○駄目
○駄目の大切なる例　第四圖……五四
○攻合の勝負は多く駄目の多少による　第五圖……五七
○無用なる駄目　第六圖……五七
○終局に於ける駄目　第七圖……五九
　第八圖……六一

打碁之部

○戰爭と布石の練習及び終局打上げ作り方
　第一局九子　自一圖至七圖……六三
　第二局八子　自一圖至六圖……七八

目次終

新式圍碁寶典　第四

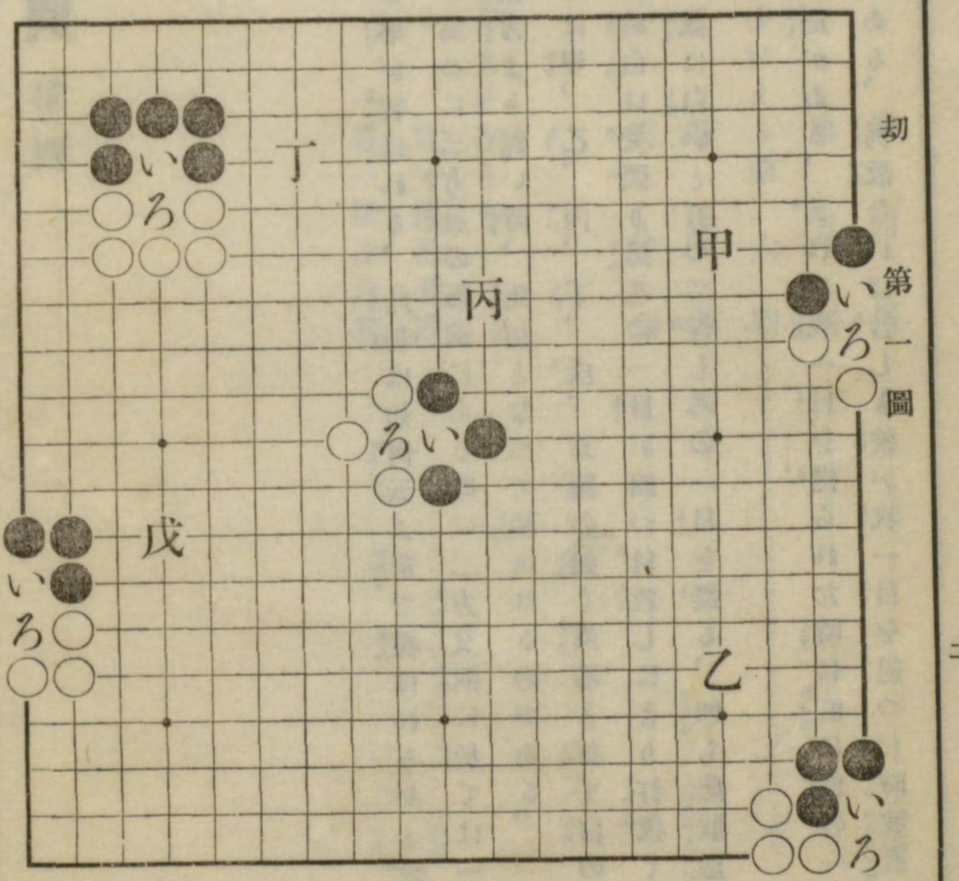
戰爭之部

切

碁を圍む上に、屢々切と云ふ事が行はれる、此切は如何云ふ形で現はれるかと云ふと黑白双方互に一子を敵の爲めに三方(邊の極端にある時は二方又隅に於ては一方)を圍まれ殘す處只一つの活力より無い時、此切となつて現はれるのである。今之れを圖によつて例を示せば甲、乙、丙、丁、戊、五圖の如く黑ろと打て白のいの一目を提つたとせんに此時白は矢張り黑ろの一目が四つ目殺しにより打拔く事の出來る形となつて居る、故に白いと打つて押しろの一目を提る、卽ち此狀態を指して切と呼ぶのである。

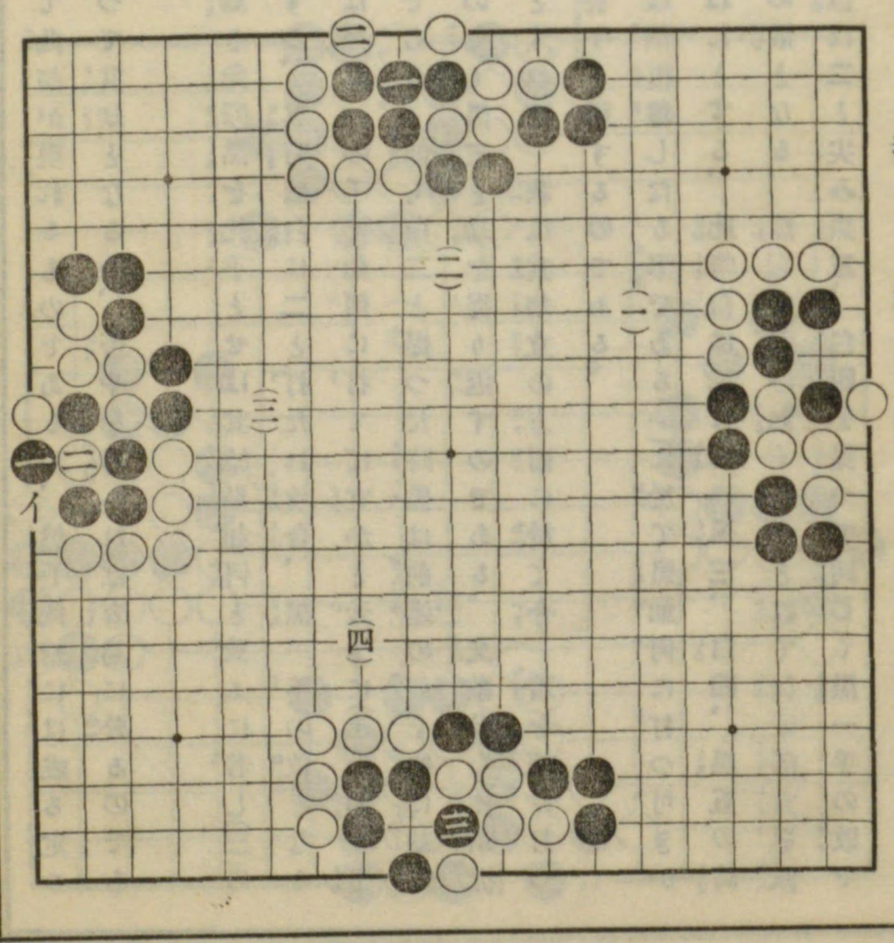
但し此切を行ふには一種の法則がある、其れは我一目を提られた時に直に彼の一子を提り返す事を禁じられてある、何故なれば若しも彼が我一目を提つた時我直

に彼の一目を提り得るものとすれば、次に彼は又我一目を提る、斯の如く互に一目を提り合つて居れば全く際限の無いものとなる、然らば絶對に一旦提られた此石は提り返へす事は出來ぬかと云ふとこゝに第二の法則がある、即ち此「刼を提り返さんとするには先づ他方面に一着刼拋を下す」此時若し敵が此刼立に應じた時初めて此刼を提る事が出來る、其時敵が亦他に刼



拋をなし此刼を提るので、斯くの如くにして刼は繼續さるゝのである、故に刼の勝敗は刼拋の有無に依て決するのであるから刼を爭はんとするには先づ必らず刼拋の多少を見なければならぬ。

第二圖然らば如何いふ形で此の刼が出來るかと云と之こそ實に千態萬狀なか〳〵一朝一夕に書き盡せるものでは無い、「即ち攻合に於ての刼、又は活に於ての刼、又死に於け



る切、其他總て戰の時に於て此切が現れるものであるが、然し此切には或る定つた形はあるので此定形によつて其切となるや、否やを考へれば容易に分るのである。

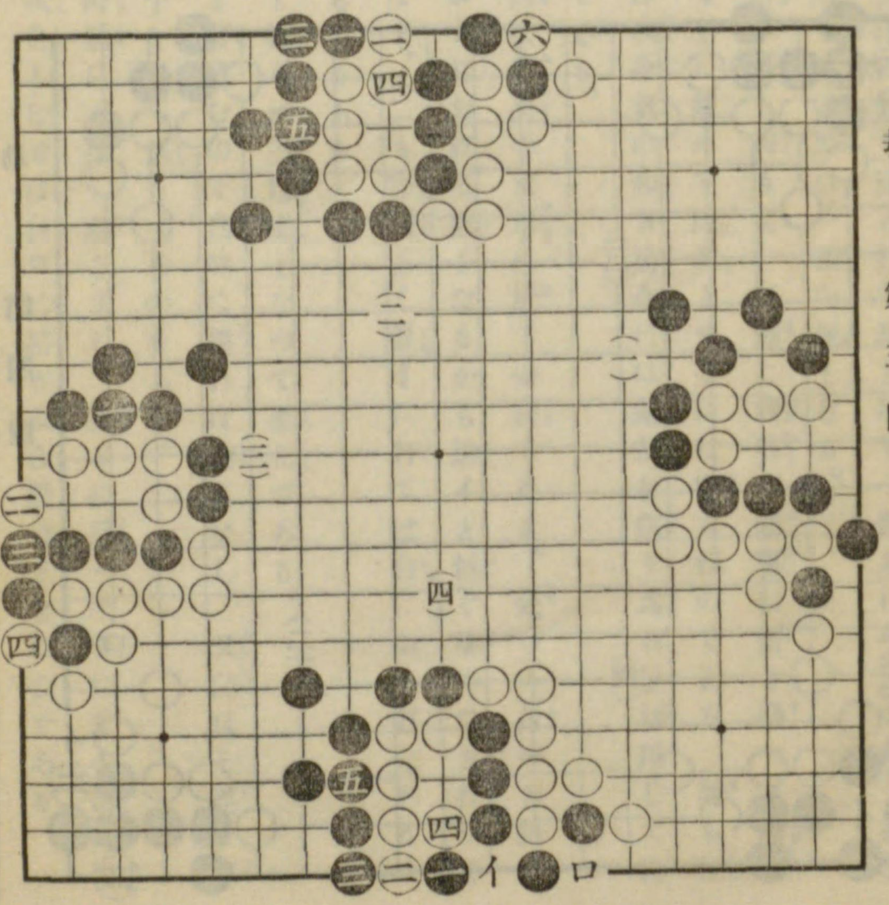
先づ其一例として下圖(一)の如き此際黑を先手とせば其結果如何と云ふに若し(三)の如く黑二と一子を粘いだとする、其時は白に二と打たれ攻合、黑一手の敗となる事前述の通りである、然らば黑は一の手で如何に打てば宜かと云ふに(二)の如く黑一と打て之れを切とするのである、卽ち白二と提つた時黑は前述の如く他に切拋をして敵之れに應ずれば(四)の如く黑三と切を提り返すのである、又敵若し此切拋に應せずして**イ**と打拔いたとすれば、我は其切立の方面に於て今一着を續け打つのである、卽ち之れを切の替りと稱するのである。

第三圖本圖の如き切の中では稍復雜したる形である(一)に於て黑如何に打つ可きか先づ(三)の如く假りに一と綽ねたとする、此時白は二に約へ黑三、白四、黑五の時白六と提つて攻合は黑一手の敗となる、然らば(三)の如く黑一と打て白の活力を減ずれば何うかと云ふと此時白は二と尖み黑三、白四を提つて同じく黑一手の敗である。

次に(四)黑一と尖む手は如何と云ふに此結果は切となるので、卽ち斯の如く尖は切とするには一種の定形である。

卽ち白二と打てば黑三と外側を詰め白四、黑五と打て**イ**點を以て切爭となし又白四は**ロ**點に於ては黑は矢張り五と詰め之れ亦**イ**の點を切爭とする。

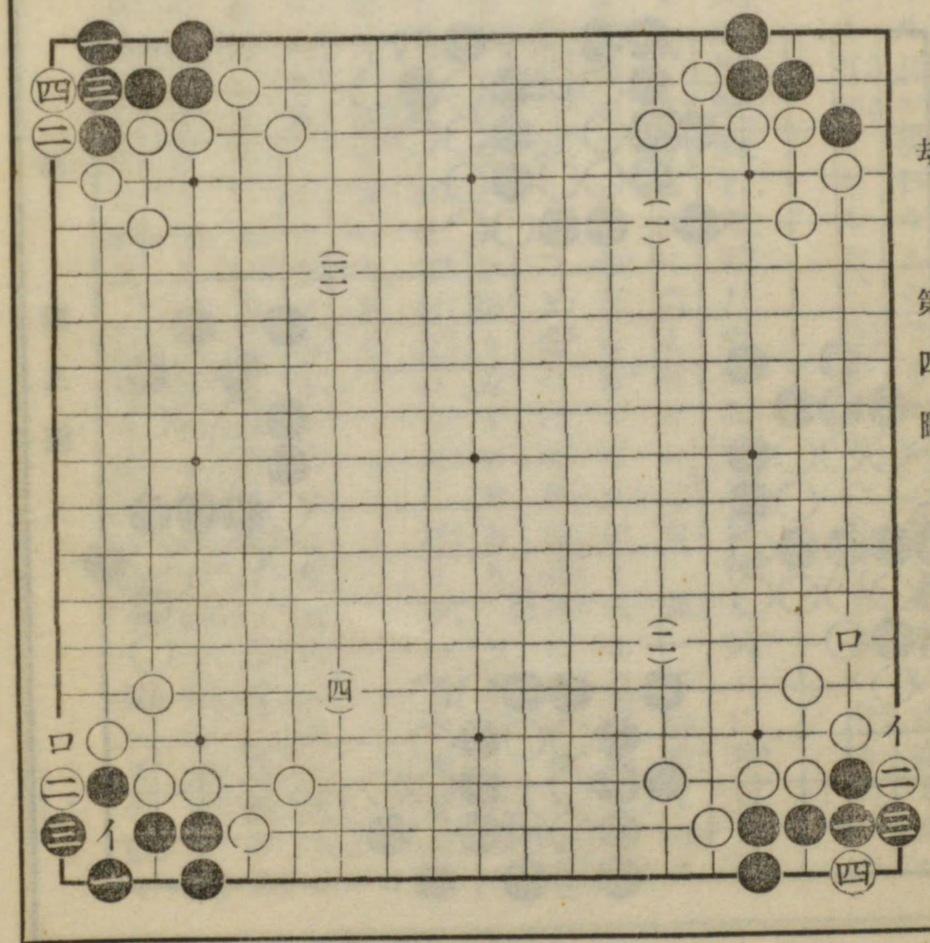
第四圖前二例は攻合に於ての切であるが本圖(一)は死活に於ける切の形である。



第三圖

(二)の如く黒若し一に粘いだとせん、其時は白二と綽ね黒三の時白四と置き黒イと一子提るも白ロと打つて二の點は缺目であるから、黒は結局死となるのである。

然らば此形に於てするには如何と打てば宜いかと云ふと(三)の如く黒一と掛粘のである、此掛粘ぐと云ふ一の手は矢張り前の尖と同じく刼になさんとするに必要なる着手である、白若し一子を提らんと二と打つて當りとせば其時(四)の如く三と打て刼となす、然るに今(三)の如く黒三に粘ぐとすれば、白に四と出られて黒は一眼の死となる。



刼　第四圖

故に此刼は萬止むを得ざる時は致し方もないが若し我石が無事に活き得べき時とか又は普通攻合勝と云ふ時などに好んで此刼とするには當らぬのである、若し反對に此石が死となるとか又は攻合負の如き場合には此刼を作り其石を利用して他に刼抛を打ち之れを爭ふのである。

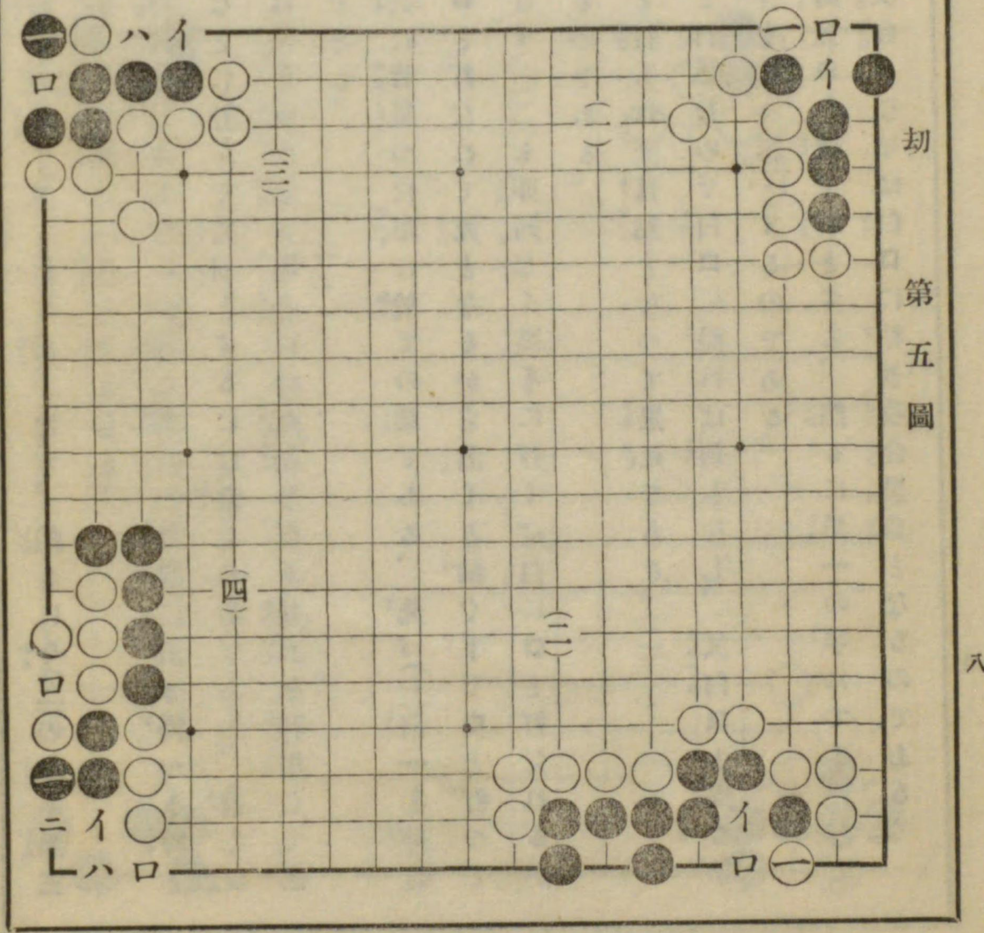
第五圖本圖は(一)(二)(三)(四)共に皆異つた形に於ての刼である、先づ(一)白一と綽ねし時黒若しイと打てば白にロと打たれて死となるから黒イと粘ぐ手でロと打つて此イ點を以て刼爭の場所となす、(二)も亦同じく黒イに打てば白にロと打たれるから黒は先づロと打て刼とするのである。

(三)黒若しイに打てば白に一と行られ三目點となつて黒死である。

故に黒イと曲る手で先づ一と打込むので白ロに提れば刼となし、又白ロと提る手をイに打てば黒ハと打て一子を提り活とするのである。

(四)黒先づ一と約へ、白イの時黒ロと提て刼とする、然るに黒一の手にてイに打てば白ハに綽ね黒ニと曲つて攻合となせば白ロに粘ぎ攻合黒負となるのである。

第六圖本圖(一)(二)(三)四)は前圖よりは稍變化多く又六つケしい形もある、先づ第一白先如何にすれば切となるかと云ふと先づイと附けるのである、此時黑ロに粘げば白ハと粘ぎ死となるから黑ロの手で直にハに打込むの外は無い、依て白ロと提り切となるのである、(二)黑先切、黑若しイと粘げば白にロと打たれ、攻合黑負であるから黑は此手を先づハと綽ねるのである、

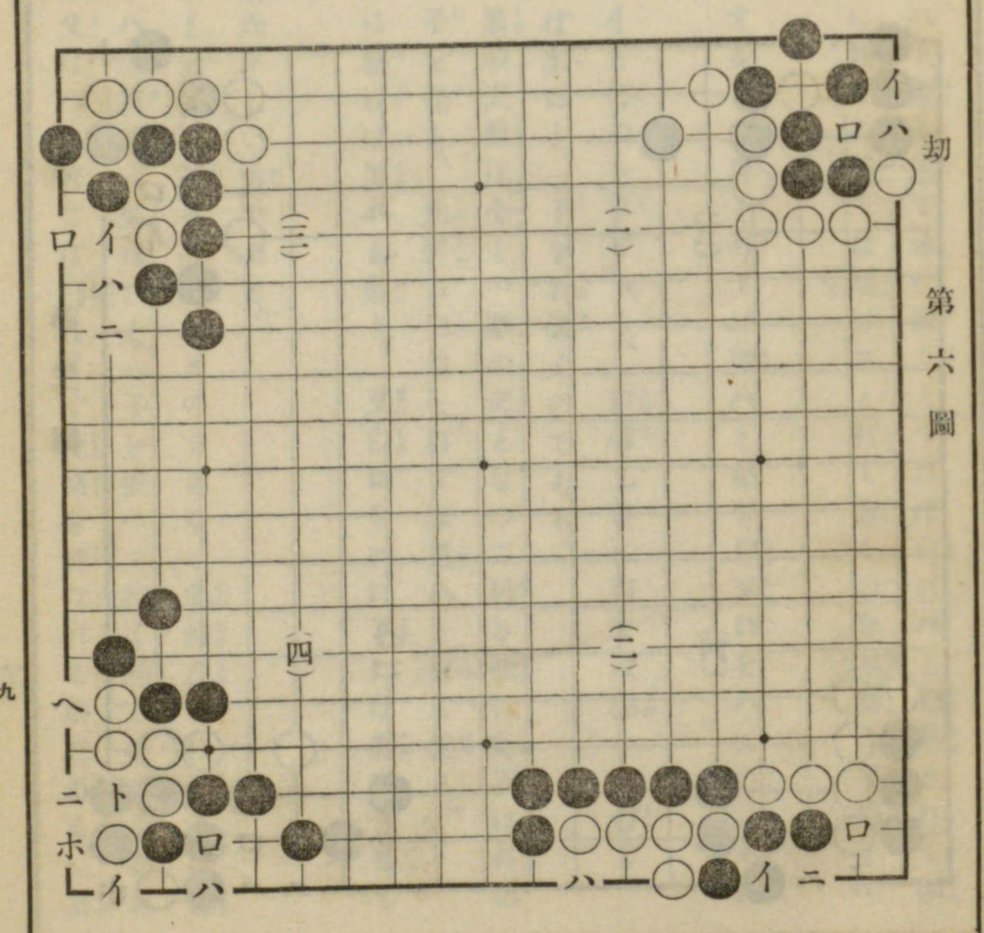


第五圖

白イと提れば黑ニと約へ白ロの時黑一子を提つて初めて切となる。

(三)白はイと二子を逃ぐるの外は無い、依て黑ロと打て切とする、若し此時白ハと打てば黑猶ほニと打て同じく切である。

(四)黑イと二段に綽ねるのである、白ロと切つた時黑ハに打て切とする、然るに黑イの二段綽を只ロと粘げば白イと下り黑ニ白ホ黑ヘ白トと打て活となるのである。



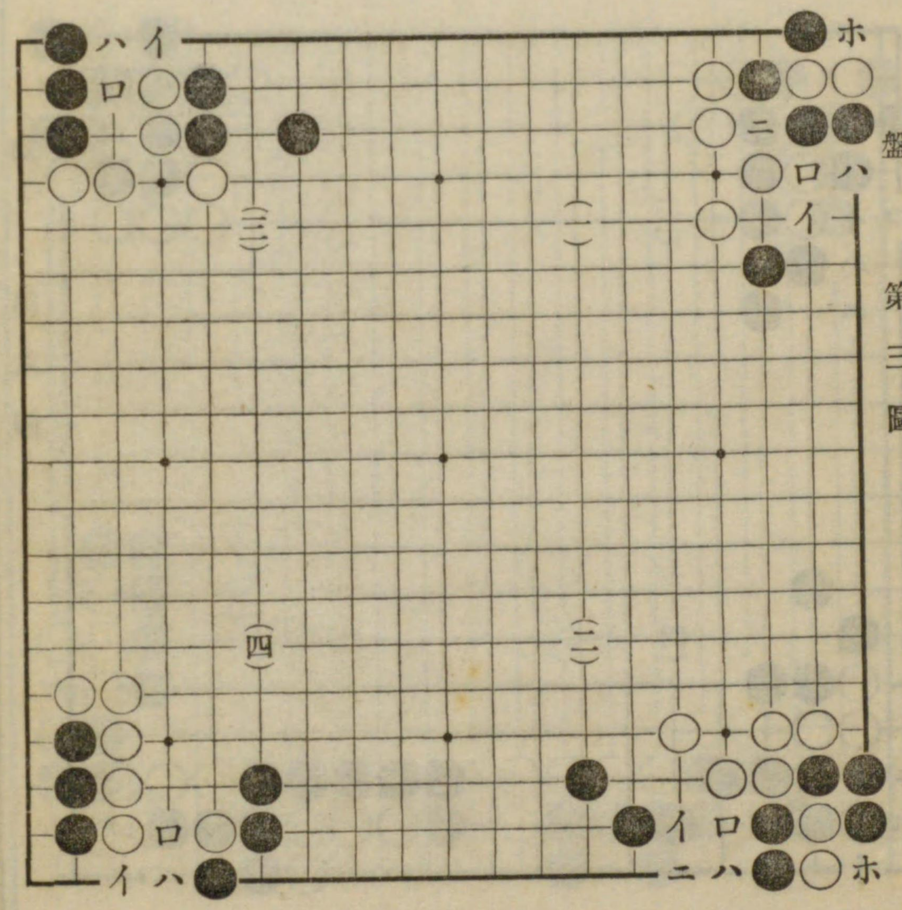
第六圖

盤

第三圖(一)黑先盤、隅の黑四目と外の一目とを接續するには黑先づイと打つのである、白其時ロに打てば黑ハに盤り白ニ黑ホと二目を提て盤るのである。

(二)黑先盤、前と同じ樣な形であるが其手筋は異つて居る。

卽ち前圖の如く黑イに打てば白にロと出でられ黑ハに打てば白にニと三目



盤　第三圖

を打拔かるゝのである又黑ハと盤る手でホに拔くとすれば白にハと切斷されて隅の黑は一眼の死である、故に此形に於ては黑はニと打て盤るのを本當の手筋とする。

(三)黑先盤、黑イと打て連絡する、白ロと打てば黑ハと粘ぎ白又ロをハに打込めば黑ロと一子を提る。

(四)黑先盤、此形に於て黑はイと打の一手である、白若しロに打てば黑ハに打て、盤る白又ロの手をハに打てば黑ロと一子を打拔くのである。

第四圖(一)黑先盤、隅にある黑の五目は全く一眼の死となつて居る故に此石は外の黑と連絡す可く先づイと一子を提る、此時に白ロと打てば黑ハと打て盤る。

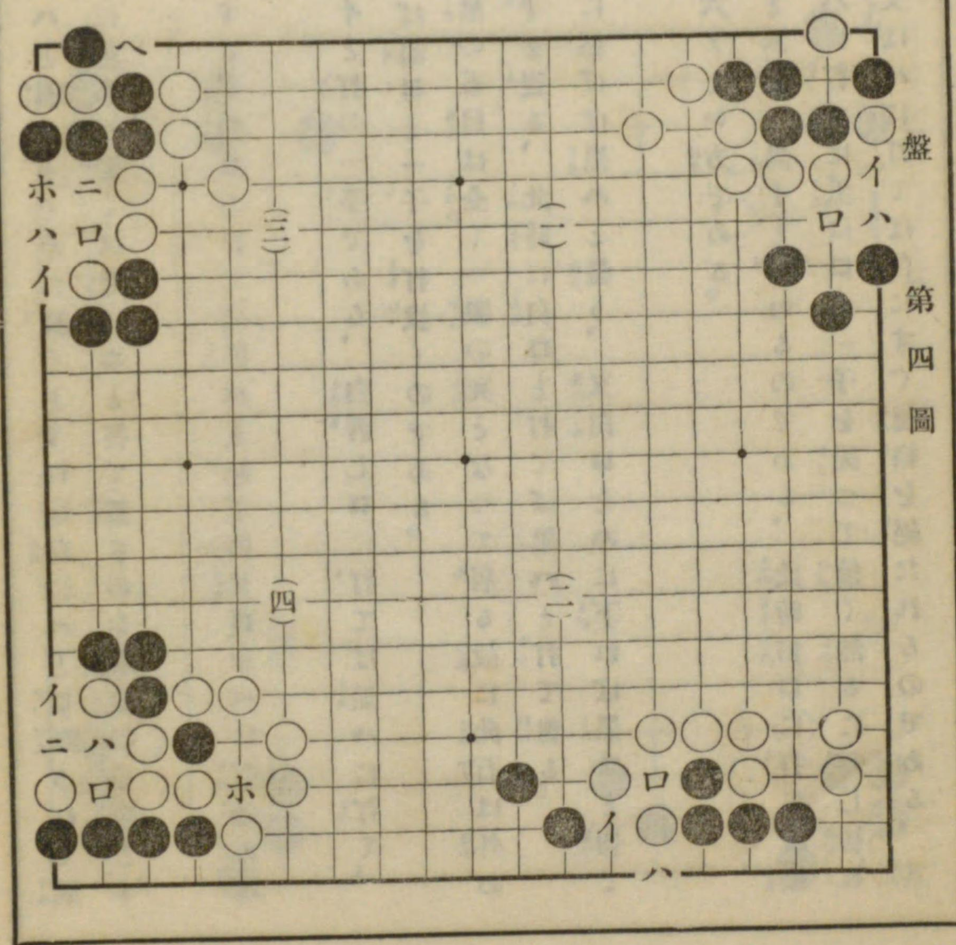
(二)黑先盤、黑イに打ち白ロに粘げば黑ハと盤り、又白ロをハに下れば黑ロと切て白の二子を提る。

(三)黑先盤、盤りの中では稍六ケしい方である。

偖如何にすれば盤となるかと云ふに黑イと綽ねるのである、此時白ロに打てば黑ハに盤り又白ロと粘ぐ手をハに打てば黑はロと一子を提つて續く然るに若し初めに黑イと綽ねる手をロとか又はハに打てば白にすぐ連絡を絕たれるのである、其

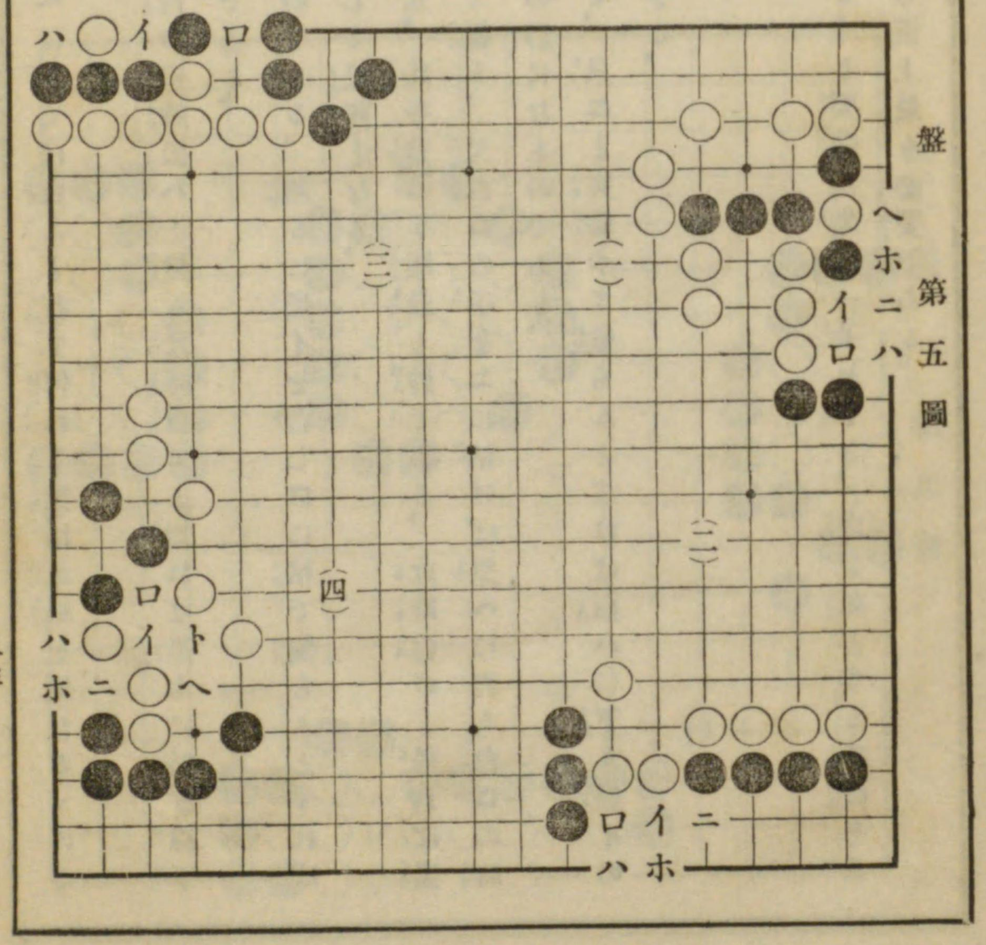
變化は黒若しロと打つた時は白ニと出で黒イの時白ホと打つ、又黒ロをハに打てば白先づニと打ち黒若しホに粘げば白イと打ち黒ロに打てば白へに打拔くのである、

(四)黒先盤、之れ亦變化の多い形である、若し黒イと綽ねれば、白にロと打たれ又黒イと綽ねる手をロの方に出れば白ハに粘ぎ黒ニに提れば白にイと打たれて同じく黒は切斷さるゝのである。



然らば黒は如何打つのが一番正しい手であるかと云ふと先づ前述の如く黒ロと出て白ハの時黒イと綽ねるのである、若し白ニに打てば黒ホと打拔き又白ニと粘ぐ手をホに打てば其時黒初めてニと打て接續するのである。

第五圖(一)黒先盤、黒先づイと打ち白ロの時黒ハと打て盤るのである、然るに黒イと打つ手を若し誤つてロに打つとすれば白イと出で黒ニと打てば白



ホと提る又黑ニと打つ手をへに打てば白ニと打て何れも黑は連絡を絶たるゝのである。

(二)黑先盤、黑先づイと打ち白ロの時黑ハと盤る此時白ニと切れば黑ホに粘ぎ以下白は如何とも手段は無いのである。

(三)黑先盤、黑イと打て盤るのである、然るに黑イを若しロに粘で盤らふとすれば白イと打込み打替への形として黑死となる、

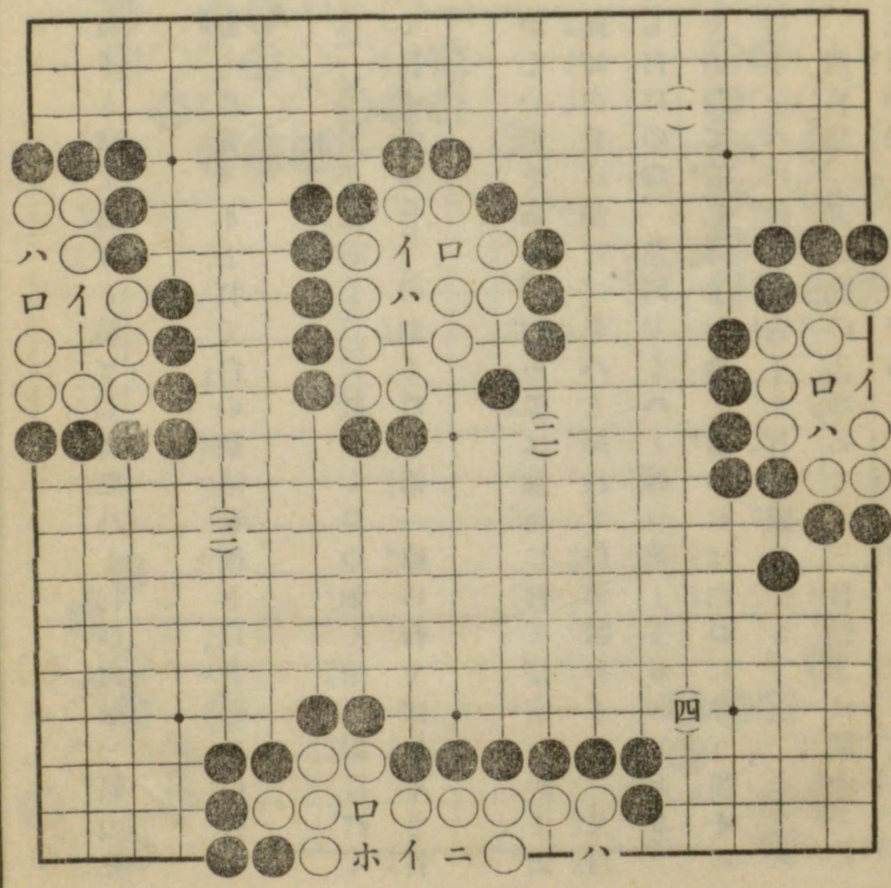
(四)黑先盤、黑先づイと打つた、此の飛の手順最も妙である、此時白ロと提れば黑ハに綽ね白ニの時黑ホと打て盤り、又白ロの手をニに粘げば黑へに打ち白ロの時黑トに粘ぎ此攻合は黑二手の勝になるのである、

然るに黑初めにイと打つ手を、只ニと突當つて盤らんとすれば白ハに下り黑イの時白ロと切て却て黑は切斷さる、

點

第九圖點とは敵將に活きんとする要點に先づ一子を下し、之を死とする手段を云ふのであつて、此點は石の死活上最も必要である。

(一)白は曲り四目の形であるから普通活の筈であるが、一つの缺點あるが爲に、黑先手の時は死となるのである、然らば黑は如何に打つべきかと云ふとイと打つのである、此時白は普通曲り四目の形ではロと打つて二眼を作るのであるが、此形に於ては黑にハと打たれて三目の白を提らるゝ缺點がある、故に止むを得ず白ハに粘ぐとすれば、既に白は死の形となつて居る



のである。

(二)之亦(一)と同じ形である、黒はイと當て白ロと粘ぎし時黒ハと行び白を一眼の死とする。

(三)前と殆んど同じ形である、卽ち黒先づイと打て白の缺陷を衝き白若しロに打てば黒ハと打て白の三子を提る。

而して此形に於て(一)と異る處は(一)に於て黒若し(三)に於けるロの如く第二線に打てば白イと打て活となり(三)に於て黒イの手を(一)の如くロと第一線に打てば白イと打て活となるのである。

(四)此形は點死の中では稍六ッかしい形である、初め黒は如何に打てば宜いかと云ふと先づイと置くのである、此時白ロに粘げば黒ハと綽ねて白の眼をとる、又白ロの手をニと打てば黒ホと打ち白ロの時、黒同じくハと綽ね死とするのである。

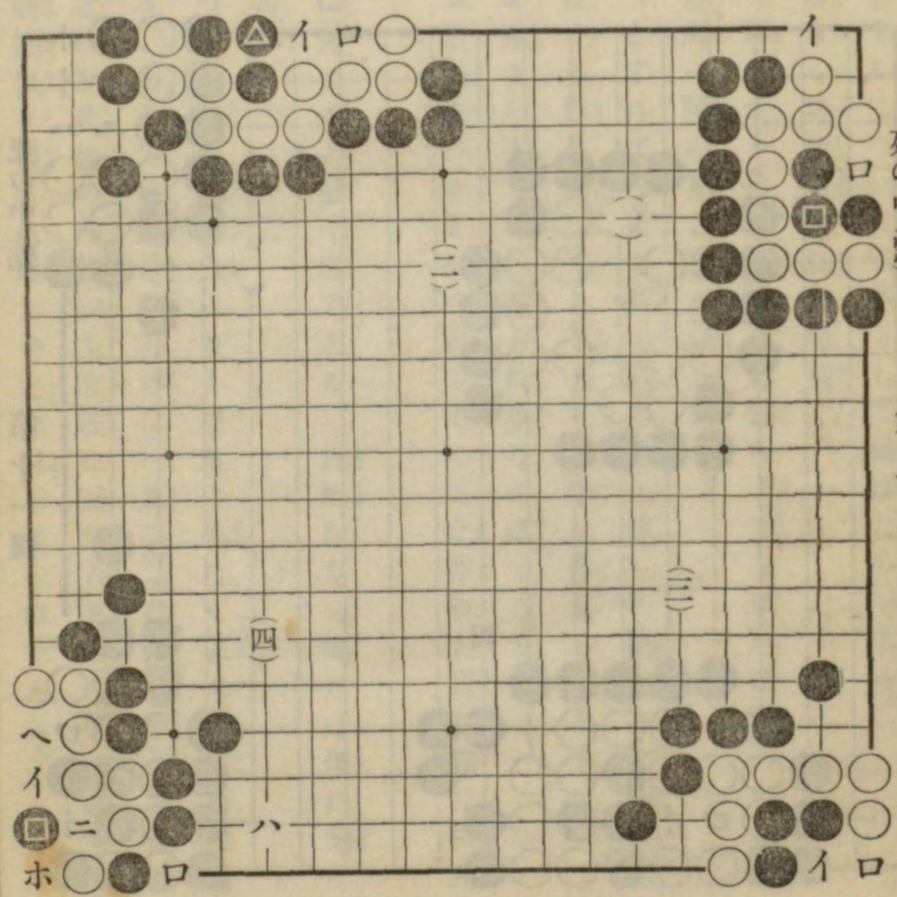
而して此中黒イと置く手順妙であつて若し此手をホと當つれば白ロに粘ぎ黒イに打てば白ハと打て活、又黒イの手をハに綽れば白イと打て眼を作る。

第十圖又點死の中には三目點、四目點、五目點の三種ある、三目點とは圖中(一)に於ける如き黒イと綽れば白は三目の點となるのである、白此時ロと打て三目を提

るも黒ロに打込めば白は一眼より無い。

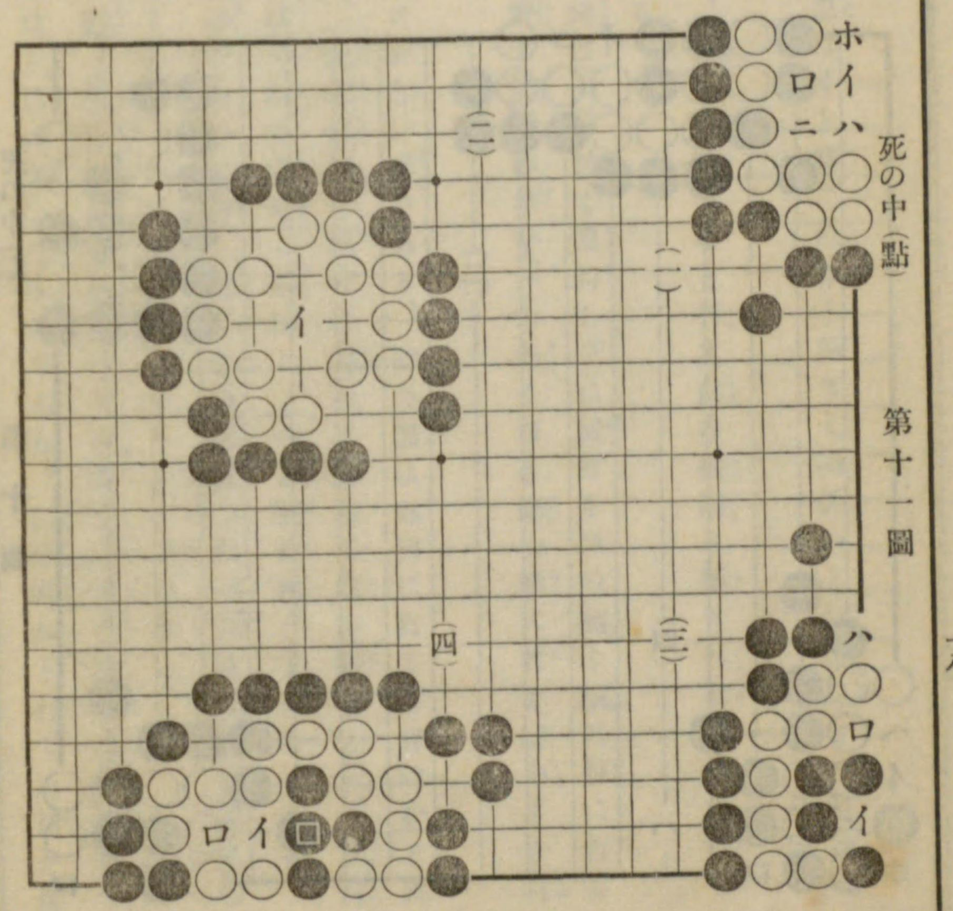
次に四目點とは圖中(二)(三)(四)の如き形であつて(二)に於ては黒先づイと打て之を四目點とする、此時白若しロと提れば黒△の點に打込み三目點とし、以下漸次二目一眼となし之を打上ぐる形とするのである。

(三)黒先イと打ち四目點とする、此時白ロと提るも白に活は無いのである(四)黒先づイと行び白若しロ



と提れば黒ハと飛び中は同じく四目點である、何故なれば此形に於て白の方では如何に打つも此石を活とする手段は無い、黒が此石を取らんとする順序を云へば先以て外側の駄目を詰め次に黒ニと打ち猶ホと打つのである卽ち(三)と同形となり結局一眼の死となる。

第十一圖五目點、點の中では一番六ッかしい形であつて或はこゝに說明する事はまだ少しく早いかも知れぬ、然し此點の說明をするについて順序として揭げたのである。



第十一圖

さて此五目點については一層よく御研究を願つて置く。

(一)黒一は此石を五目點として死とするには必ずイの點に下さなければならぬ、斯くなつては白如何にするも結局一眼の死となるのである。

然るに黒イの手にてロに打つとすれば白イと打てホの點と他に一眼つゝを作り又黒ロの手でニ、ハ或はホと打つも白は常にイと下して二眼を作るのである。

故に此イ點は此形に於て白を殺さんとするに最も肝要なる處である。

次に(二)に於ては如何かと云ふと黒先づイと打つのであつて之亦前と同じ理で白死となる。

(三)黒先五目點の死とするには先づイと粘ぐのである、此時白ロに提れば黒は猶イ點に下して(一)と同じ形とする。

(四)黒先五目點とするには先づイと打つ此時白はロと提るの外なく依て黒重ねて□の點に下し(二)と同じ形とする、而して此五目點の形は(一)及び(二)の如き形となるものに限つて云ふのであつて之れを此他の形は(卽ち直線に五目あるもの又は曲り四目の一路長きもの等)組織に缺點無き限りは殘らず之を活とするのである。

而して前述の形に於ける五目點は結局如何にすれば死の形となるかと云ふと假りに一圖に於て黑ロイと置かれし時、白の方で如何に打つも活とする手は無いが若し黑から此石を提らんとするには先づロに詰め次にハに詰めニ或はホと打て前圖の(二)及び(三)と同じ形とするのである。

若し如斯なりし後の變化は順々に前の三目、一目及び一眼の部を參照せらるれば明かに了解せらるゝのである。

活

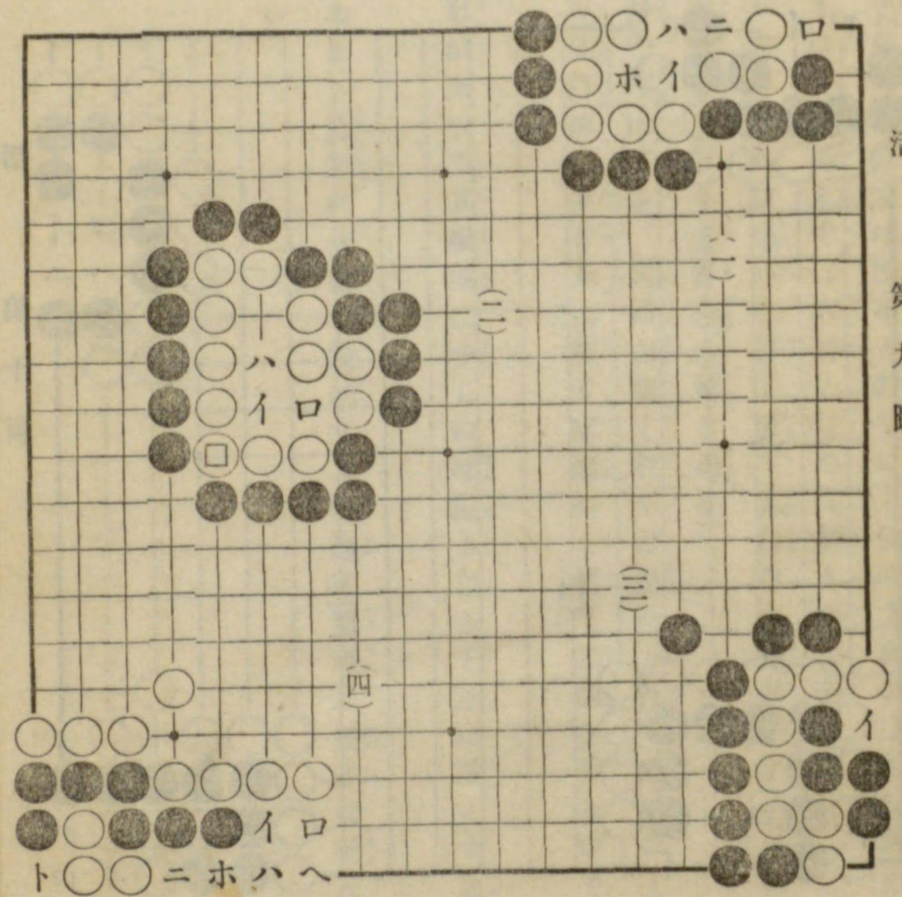
第九圖(一)此形は前の死の第九圖(三)と同じ形である、而して曩には黑先イと打て此石を死としたのであるが此形に於ては黑に猶一點ロに駄目がある、故に白は活である、卽ち黑イと打つも白はハと打てニと他の方面に一眼づゝを打ち又黑イの手をハと打つても白はイと打てホと他の處に一眼づゝを持つのである。

(二)此形も亦死九圖(二)と殆んど同形である、只前(一)に於ては㊀の點を黑に塞がれるから、黑は先づイと切り白ロの時黑ハと打て之を死となしたのであるが此形に於ては㊀の點を白が塞いで居るから、黑はイと打つも白ハと打て二眼とし又黑イ

の手をハと打つも白イと打て二眼を作るのである。

(三)白先イと打て此石を活とするのである、然し若し黑の先手とすればイと打て白死とするのである、何故なれば白よりイと下せば此石は曲り四目の形となるが反對に黑よりイと打つとすれば五目點死の形となるのである。

(四)黑先づイと出で白ロの時黑ハと曲り白ニ黑ホと打ち白へ黑トと提て曲り四目の活なるのである。



第十圖(一)若し白先なればイと打て死とする事前に度々説明せし如くである然るに黑先とすればロ或はイと打て二眼を作る、然し同じく手を入るゝとするもハ或はニと打てば死となるのである、卽ち黑ハの時は白イと打て死又黑ハの手をニに打てば白ロと打て死となる。

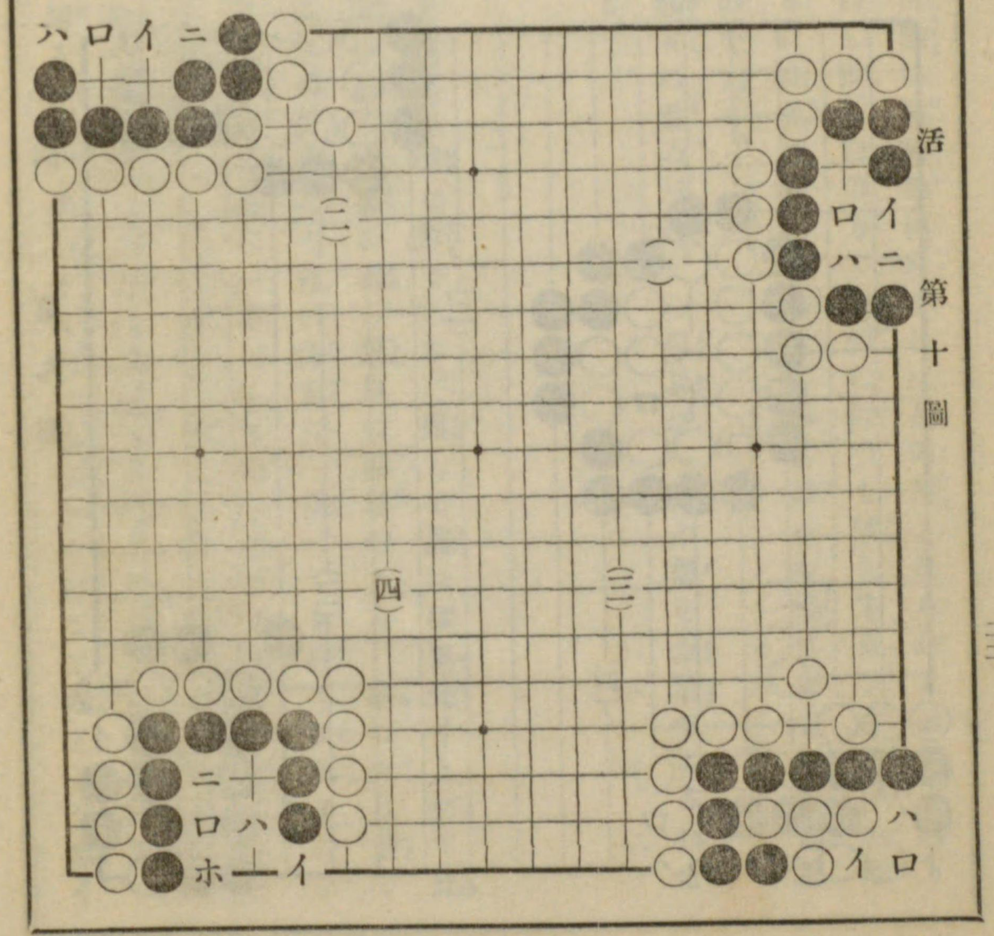
(二)此形は此儘で別に手を費さずとも既に活となつて居る、卽ち白イと打てば黑ロと打てハと他の方面に二眼を持つ而して此形は前の五目點よりは一路廣く中は六目となつて居るのである。

(三)黑先づイと打込み、白若しロに提れば黑ハと打て活、又白ロと提る手をハに行びれば黑ロと提て此五目は活の形である(五目點の形と異る)

(四)黑先づイと下つて中を六目の形とする、此時白ロと打てば黑ハと打ち白猶ニと打てば黑ホと打て二眼を作る又白ニの手をホに打てば黑ニと打て二眼を作るのである。

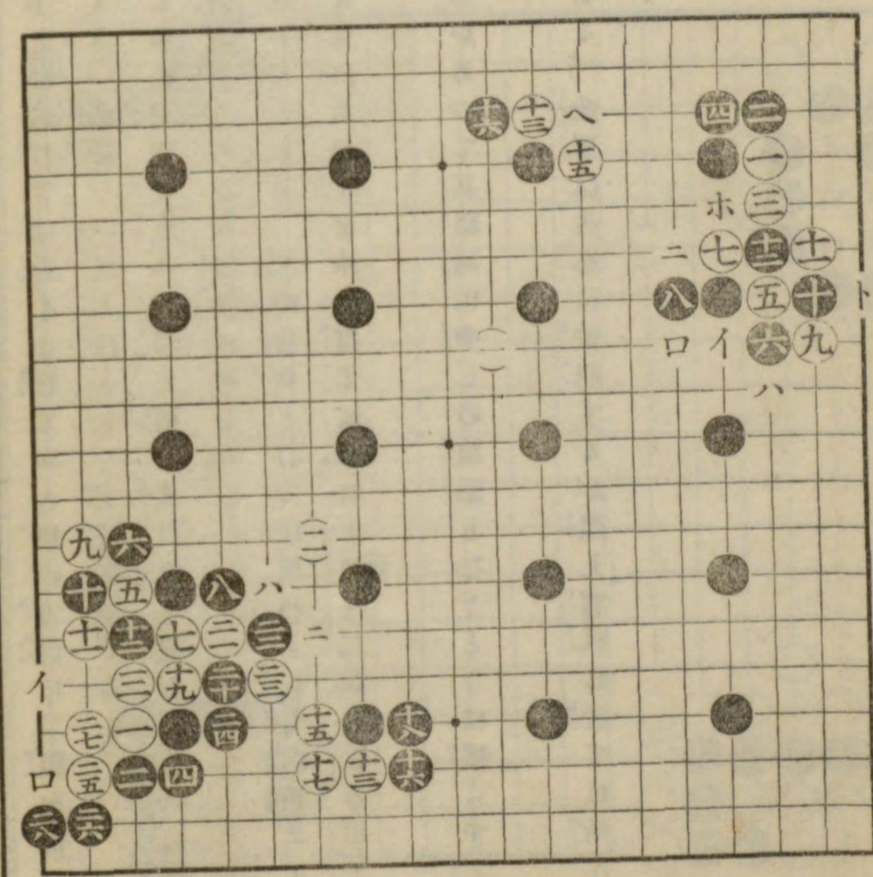
斯の如く中に六目以上の地形があつて其組織に少しの缺點もなきときは殘らず之を活とするのである。

(但し花六目の場合は別である、此形は次卷に説明するが然し實戰に於ては殆んど出來ぬ形と云ふてもよい)



二十目の實戰

第二十五圖二十目と二十五目との比較、二十目の置碁と二十五目の置碁と異る點は、二十五目は悉く二路を隔て、順序よく配列してあるが二十目は縱の五列は同じであるが、横の四列は三路を隔て居る、故に此三段の方面は多少二十五目の時より變化が多いと見なければならぬ、然し此二十五目と二十目の差は九目と四目



實戰　第二十五圖　黑ツグ

の差又は五目と先の如くに甚しい差のあるものでは無い、故に九目と四目又は五目と先の如き時は其布石法も全く一變するであるが然し此二十五目と二十目の時は夫れ程ではなく只三路の方面を注意すれば宜いのである、◎此圖以下第二十七圖までは先づ切の練習を第一とし次に死活、攻合等を掲げたのであつて碁に於て最も面倒なのは切の變化である。

圖中白一に對する黑二の手は前述の如く薄弱なる隅を守ると共に强力なる我勢力範圍内に白を追擊する着意である。

白三の手で四の處に切違ひし變化は前に度々説明せし通りであつて此變化に於ては白は常に不結果に終つたから本圖では白三と一の一子を堅くした、此時黑は如何に打を宜しとするかと云ふと圖の如く四と守るのである、次に白五の時黑六と手强く約へつけしは此場合宜い手であつて此時白若しイと切れば黑はロと征に提る、又白圖の如く七と打てば黑は堅く八と行びるのである。

愈々切爭に入る、白九は無論切となさんとして斯く綽ねたのであつて此時黑若し切を恐れて只八と行びたとすれば白は十一と打ち黑二の時白ホと打て完全なる活形とするのである、故に黑十と切り白十一と切に受けし時黑十二と切を提つたの

である。

偖此時に白は如何に打つ可きものであらうか、今此形を見るに白は十二の一子が當りとなつて居るが前述の如く切の法則として敵の提つた許りの切を直に提り返す事を許されぬのである、必ず他の方面に一着切抛を打ち黑が其方面に應せし時初めて其切を提るのである。

白適當なる切抛なし、今圖について見るに黑十二と切を提つた時白は此際如何なる點を切抛とすれば黑の最も苦痛を感ずる處であるかと云ふに、斯く碁の初めに於てまた石の死活も無く適當なる切抛もないから止むを得ず十三に打つたのである、黑は此十三の白に應ぜずして十四と粘ぎ切勝としたのである。

斯く黑に十四と粘がれし爲め一、三以下の白五、六目は殘らず死滅したも同じ石となつた。

(二)切の影響大なり、前圖十六よりの變化である、黑に十四と切を接續されたに依て、白は圖の如く十三、十五と此方面に二着連けて打つたのであるが少しも黑に影響し無いのである、卽ち黑十六と約へ、次で十八と堅く守つて置いた、此時白は一、三以下の四目を逃げんと十九に粘いだのであるが然し此手は甚だ無理であつて圖の如く黑に二十と約へつけられ、次で二二と約へられては白は外へ逃げ出すに策の施しやうが無いのである故に下の方面に於て二五、二七と綽ね粘ぎ眼を作らんとしたのであるが、黑に二八と下られて矢張り白は一眼より無い事となつた、卽ち白イと打てば黑ロと出でゝ死、又白イの手をロに打てば黑イと打て白の眼を取る事前述の通りである、又上の方の二二の黑は今の處其活力は二つより無いが此石は何れかの我石に連續する石である、卽ち白ハに切れば黑ニと逃げ又白ハを二の方から當てれば黑ハと接續するのである、斯く切の勝敗は其影響する處其大きいのである。

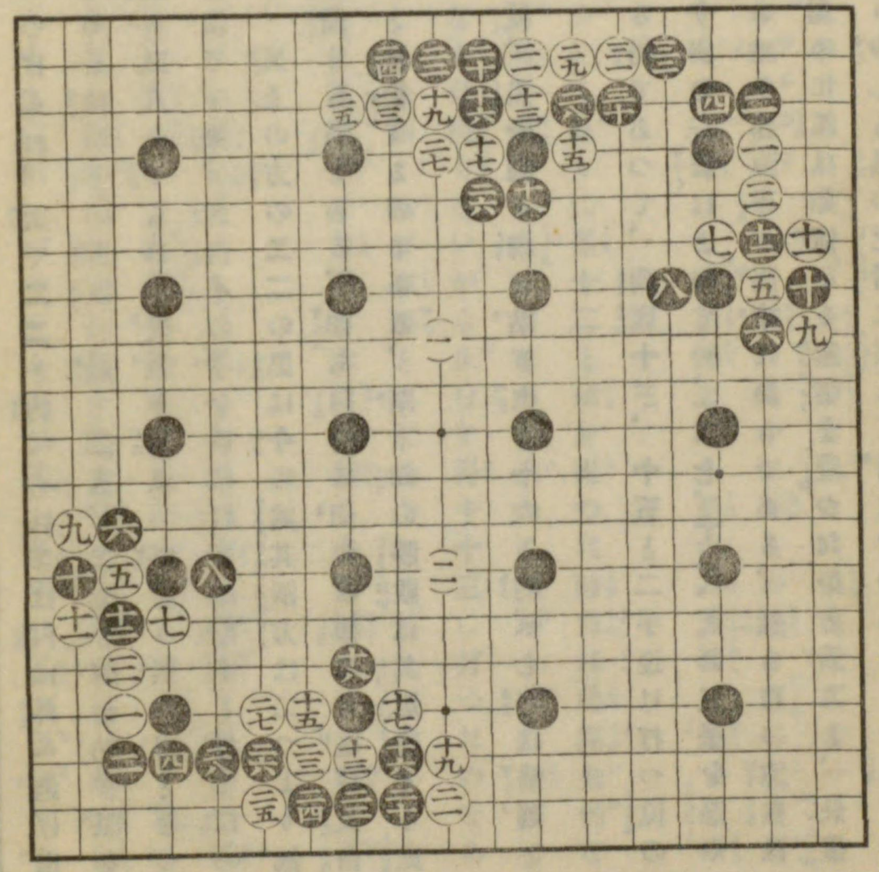
第二十六圖(一)切。粘と切。替の比較、黑十四と切を粘ぎ次に十六と約へし迄は前圖と同じである。

黑十四と切を粘ぎし手は大なる得であつて、到底十三、十五と二手連け打つ位の比では無い、何故なれば黑は十四の一着によつて一、三、七、十一、九の五子を悉く死滅せしめ且此方面に數十目の地を作る事が出來たからである、然るに一方白は十三、十五と二着を下したが爲めに黑は如何なる影響を蒙つたかと云ふと、只僅に地を破られたと云ふに止まり少しも黑の死活に關して居ないのみならず黑に十

六と約へられたが爲めに此二目の白は反て攻擊せらるゝ事となつた、白十七に切り次に十九、二一と打ちし手は此際別に他に好手段も無いから止むを得ず斯く打つたのである。

此時黑は如何に打てば宜いかと云ふと黑は十六、二十の二子の活力を見るに二つであるから、先づ此二子の活力を增す事を第一とする。

扨其活力を三つとした時



實戰　第二十六圖　白ツグ

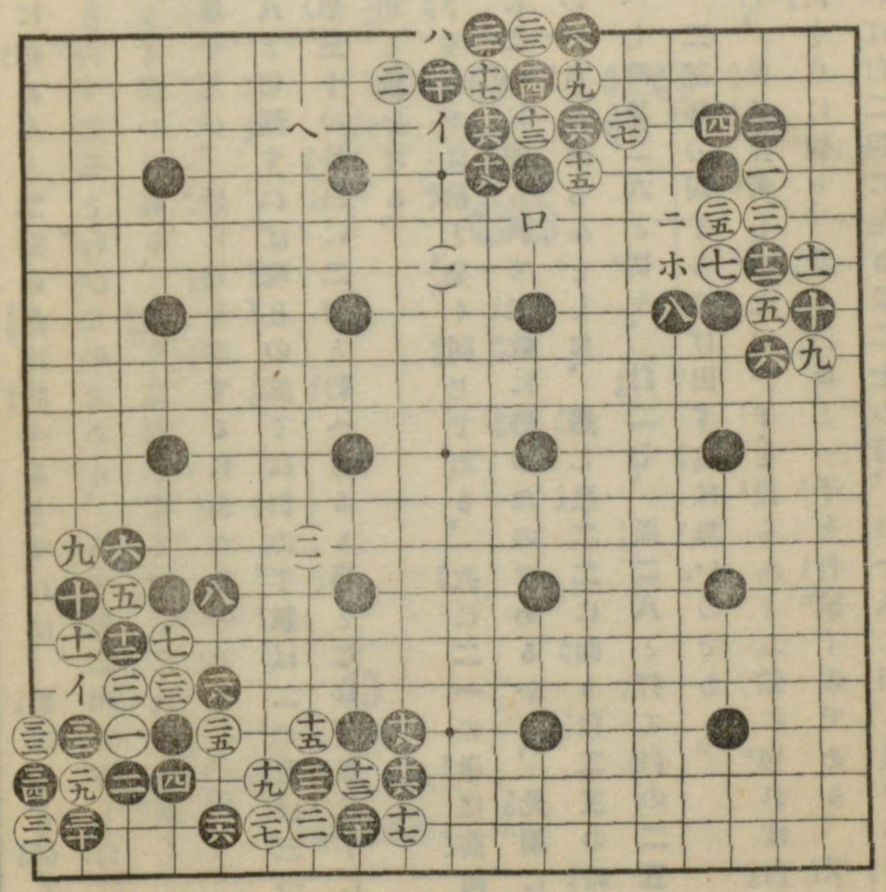
に白若し黑の活力を猶二つに縮めんと二四の處に約へるとすれば、黑二七と切て白は兩當りとなるから止むを得ず二三と行ぴたのである、依て黑二四と押し白二五の時黑其活力の數を算へると四つである、故に二六と當て次で二八と切斷し、下の白四子を提るやうに手順を運び、遂に功を奏するに至つたのである。

然るに黑二四の時に若し二八と切斷すれば現在の處では白の手數は二つ黑は三つであるが、白二九に曲られ黑三十の時白に二四と約へらるゝ事となれば黑二手に對する白は三手となり、黑却て負となる。

(二)白を鏖殺にす、黑二十の下りまでは前と全く同じである、次に二一の手は前圖に於ては二二の處に約へ黑に二一に曲られて失敗に終つたのであるから、此圖に於ては白先づ二一と約へ黑の二目を提らんとした、然し黑二二に曲り白二三の時黑猶二四と出て白二五と約へし時黑二六と切り、白二七、黑二八と打て白の二五の一子を提る、從つて十三、二三等の四子も逃げ出す途は無いのである。

第二十七圖白十七の綽面白し、此時黑若し十七の一子を提らんと二四に切れば白二六に粘ぎ黑二十に提れば白十八に切り、黑イ白ロと一子を打拔くのである、又黑二四と切る手を二六に切れば白二四に粘ぎ黑二七の時、白十八に切り黑ロの時

白イと一子を打拔く、故に黒は圖の如く十八と粘ぎ白十九と掛粘ぐ事となつた、白二一の手は次にイと切て二十の一目を提らんとする手である、故に黒は此際イと粘いで置くのが一番堅い手であるが、夫では白にハと盤られて地を破られるから斯く粘ぐ前に先づ一着二二と綽ね、十七の一子を當りとしたのである、此時白二三の手を二四と粘げば其時黒はイと粘いで二



實戰　第二十七圖　白ッグ

一の白を全く孤立の石とするのである。亦刼爭の變化、白二三を刼と仕掛け黒二四と刼を提つた時、白は局面を見渡すに何れに打つも之れに代る可き適當なる刼拋も無いから止むを得ず二五と粘いだのであるが黒は直に二六と打拔き白二七の時黒二八と打拔いたのである。斯くなつては白二五と粘ぎし白石全部眼を作る餘地なく殆んど死にとなつたのである、又假りに黒は此石を提る事が出來ぬとするも十四と粘ぎし處、又二八と打拔きし處の外側は非常に厚壯であり且優勢である。刼は打拔くを宜とす、然るに黒二六と刼を打拔く手を二と打て此刼拋に應ずるとすれば白十七と提り今度は黒刼拋に窮するのである、ホと打て此處を確かに守れば白ハと打拔き黒イの時白へと飛出すのである、今斯の結果と圖の如く黒二八と打拔きし迄の結果とを比較して見れば、何れが有利であるかゞ明らかになるのである。

(二)此圖は白十九と掛粘、黒二十の時、白二一と刼を仕掛けたのである、依て黒二二と提り白二三の時、黒二四と刼を勝ち白二五の時、黒二六と覗き先づ隅を堅くして次に二八と切斷した。

白は常に刼抛に因る、白二九、三一と綽ねて隅の黒の眼をとらんとせし時に黒は三二と切り二九の一子を當りとしたのである、此時白イと打てば黒三四と打拔き白イの手を三四に粘げば黒三三と打て黒の勝となる事云ふ迄も無い。白三三と猶刼を仕掛けし時も黒に三四と提られ矢張り白は他に刼抛も無いのである、如斯なつては白同じく全敗の形である。

練習問題(攻合)

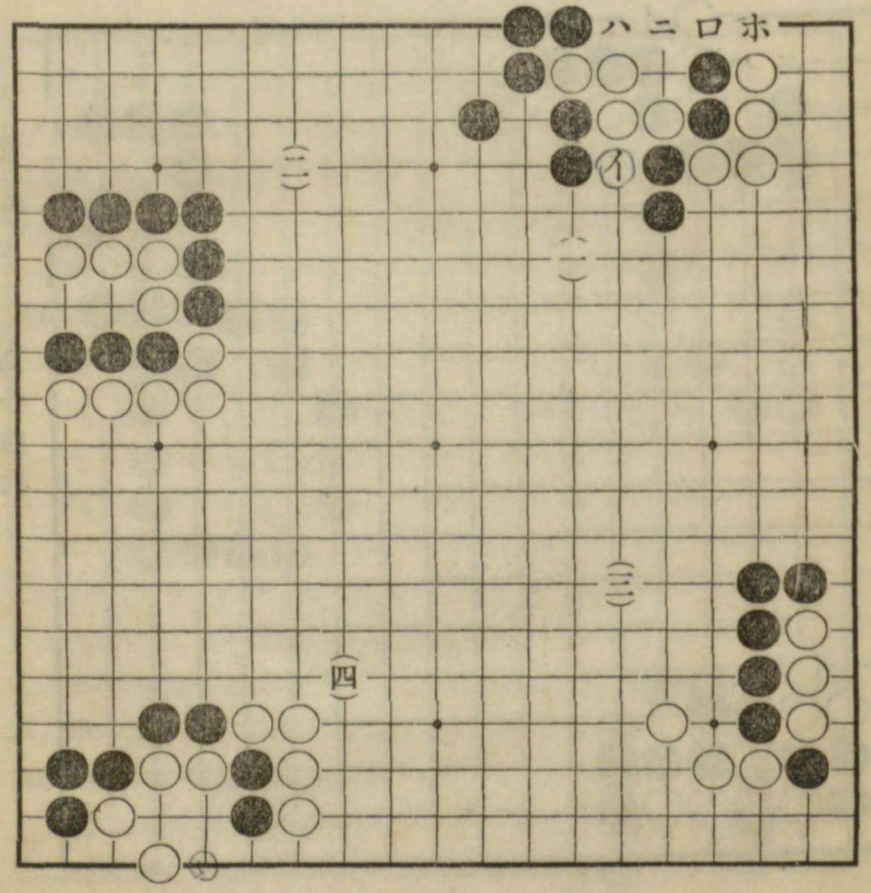
第十三圖此圖より以下死、活、刼、攻合等の詰物は先づ初め練習用として圖を出し後に其解答を附する事にした、故に之を研究するに當ては先づ初めに於て如何すれば攻合勝となるかを考へて然る後解答の部と對照し以て其相違なきや否やを確めれば一層明瞭になるのである。

(一)黒先攻合勝、黒二手白三手であるから、假令此際黒先手とするも普通では黒に勝は無い、卽ち黒イに打てば白ロと綽ね、又黒イをハに打てば同じくロと綽ねるのである、又黒ハの手をロに下れば白ニ黒イの時、白ホと打て之れも黒敗である然らば此他の手段を以て如何なる處に打てば黒勝となるであるか。

(二)黒先攻合勝、(一)と稍似て居るが然し(一)よりは手數の長い丈に其變化も亦複雜である。

(三)黒先攻合勝、白三手黒二手であるから黒は此際何とかして其手數を延ばす事を工夫しなければならぬ。

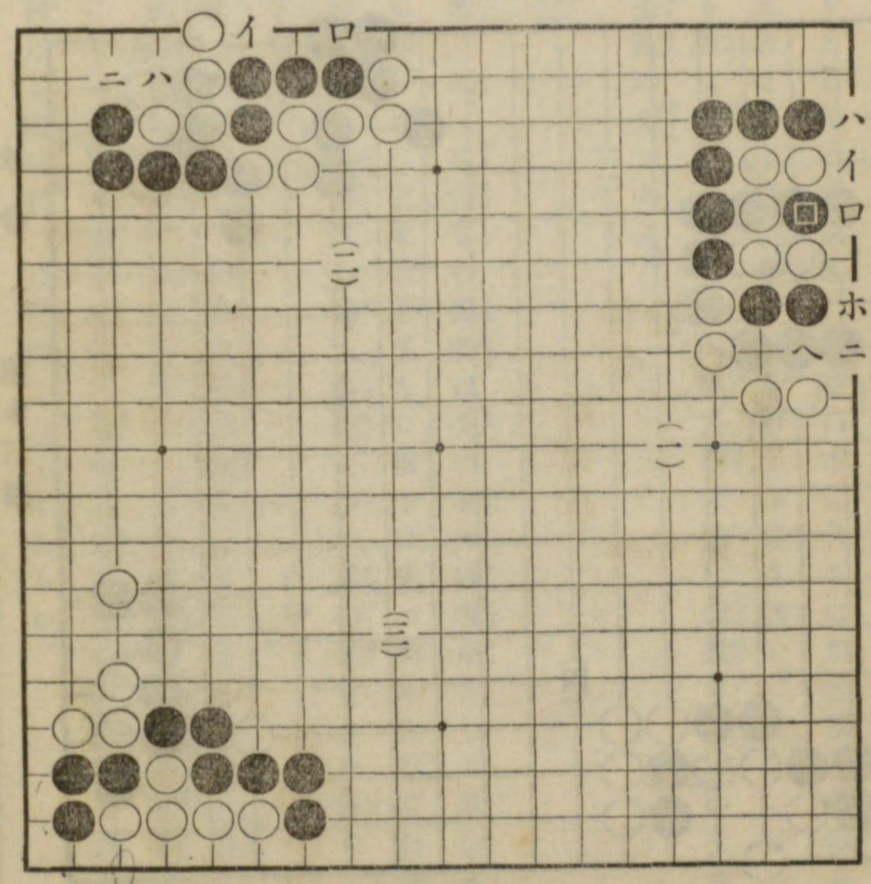
(四)黒先攻合勝、如斯問題をよく研究して置けば若し他の形に遭遇せし時に甚だ平易なる許りでなく又誤りのない判斷を下し得るものである。



攻合　第十三圖

第十四圖(一)黒先攻合勝、黒イに打てば白ロに提り黒ハ白ニ黒ホの時、白へと打て黒の敗となる、故に黒は初めに回の石を利用し以て白の手を縮め勝とするのである。

(二)黒先攻合勝、黒若しイと打て白を攻めんとすれば直に白にロと當られ、又黒イの手をハと打てば白ニと切同じく黒負である、其他の手段で黒は如何に打てば宜いのであるか。

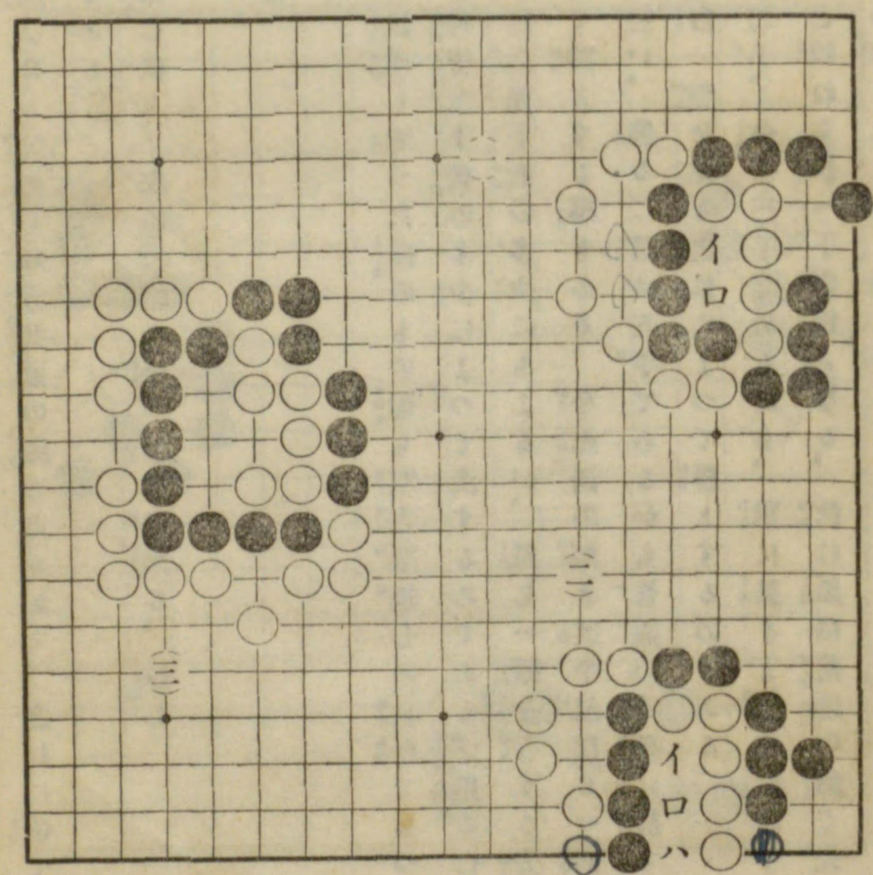


攻合　第十四圖

(三)黒先攻合勝、白四手黒三手であるが黒は或る面白き手筋によつて反對に勝とするのである。

第十五圖(一)黒先攻合勝、黒五手白四手の黒先であるが、然しイ及びロの二點は白、黒共通であつて、如斯手數を有するものは攻合の中でも稍むつかしい方である。

(二)黒先攻合勝、黒六手白四手であつて、其上に猶黒先であるから手を抜くも黒勝の樣であるが、然



攻合　第十五圖

しイ、ロ、ハの如きは前のイ及びロと同じく双方共通の處であるから、之れに依て黑先漸く一手の勝となるのである。

(三)白先攻合勝、攻合の中其形に依り、左の三種に分つ事が出來る、卽ち

一、双方眼なしの攻合

二、一眼と眼無しの攻合

三、大點と小點の攻合

此中一に屬するものは前より說明し來つた處のもの卽ち双方眼無しの攻合であつて、或る特別の場合を除くの外皆其手數の多少によつて決するのである、然るに「眼あり眼なし」の攻合に至つては勿論手數の多少にもよるが、然し一眼を有する方は或る場合には少い手數を以て勝とする事もある、今此圖の如き其平易なる一例であつて、白は一見三手より無い、然るに黑は五手であるから普通の攻合に於ては白勝となる筈は無いが然し白一眼を作り之れによつて勝とするのである。

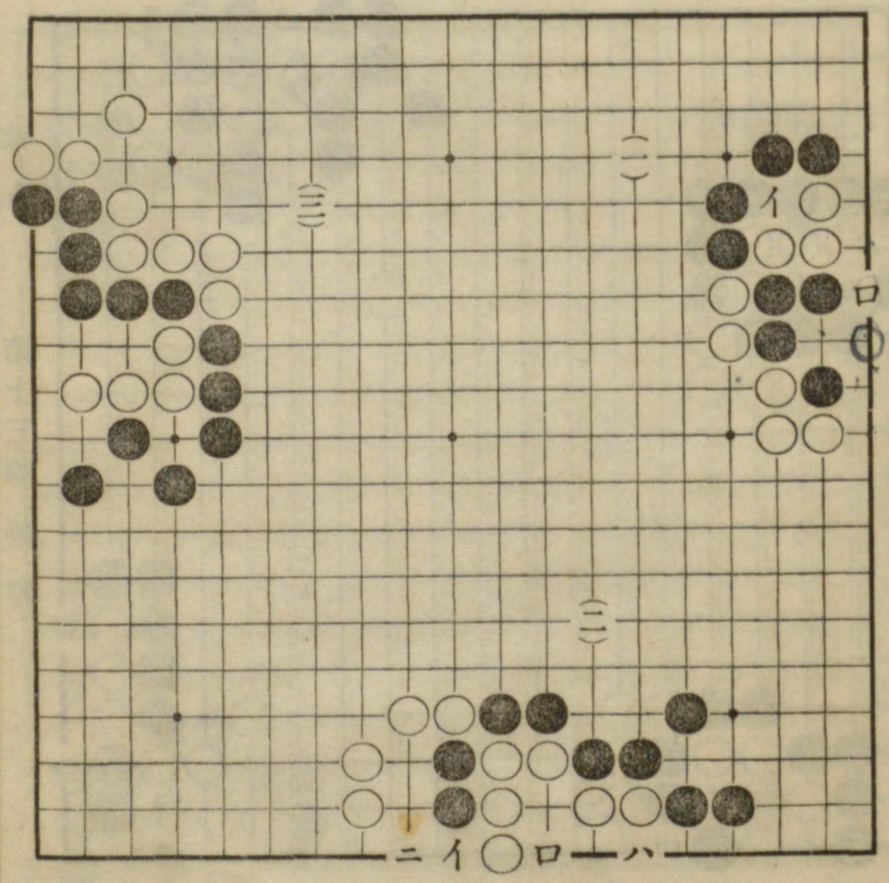
第十六圖(一)黑先攻合勝、黑は二手、白は三手であるから、單に黑イと打て白の手數を縮むとすれば、白よりロと綽ねられ一手の負となる、故に黑は前述の如く先づ一眼を作り、眼あり眼なしの形として勝とするのである。

(二)黑先攻合勝、黑若しイと打てば白はロに一眼を作り、黑ハの時、白ニと打て黑負となるのである、故に黑は初にイと約へる手で他の手段により白の手數を縮める事を工夫しなければならぬ。

(三)黑先攻合勝、黑四手、白五手であるが、之亦前の如く、黑一眼を作り、之れに依て勝とする。

第十三圖解答

第十三圖(一)黑先攻合勝、圖の如く黑一の尖は、此

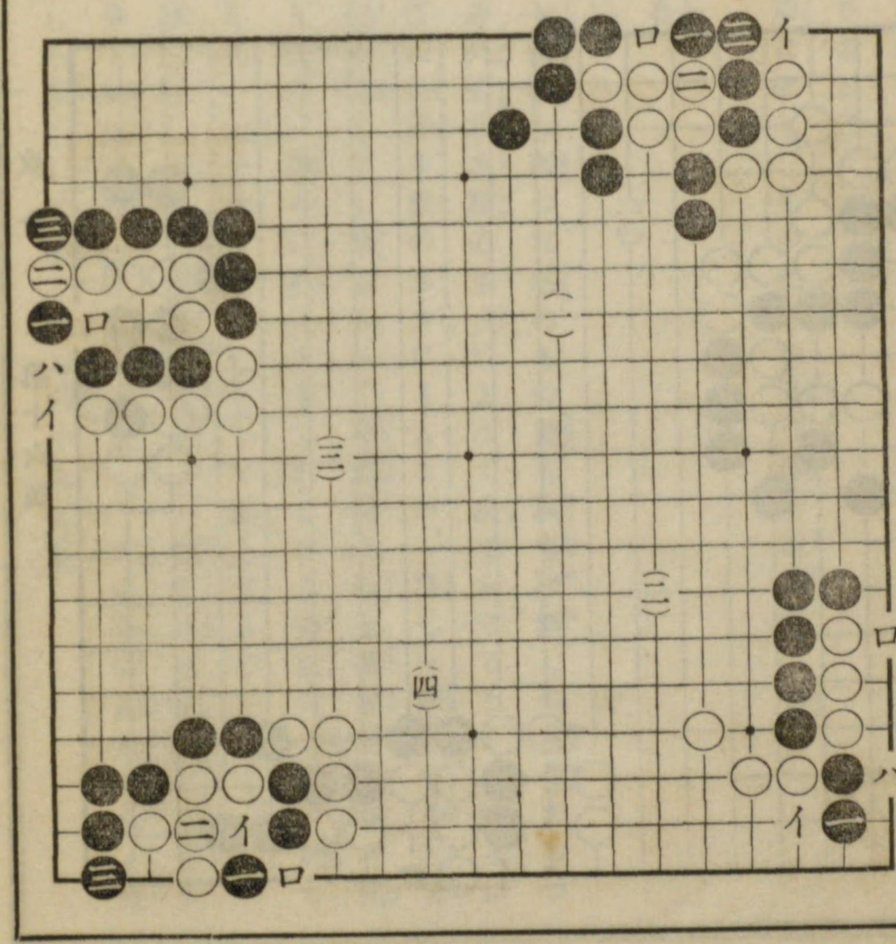


攻合　第十六圖

形に於ける好手である、即ち白二黑三と粘ぎ白負である、又白二の手を只イと下れば黑ロに粘ぎ、白三黑二となつて同じく黑勝となる。

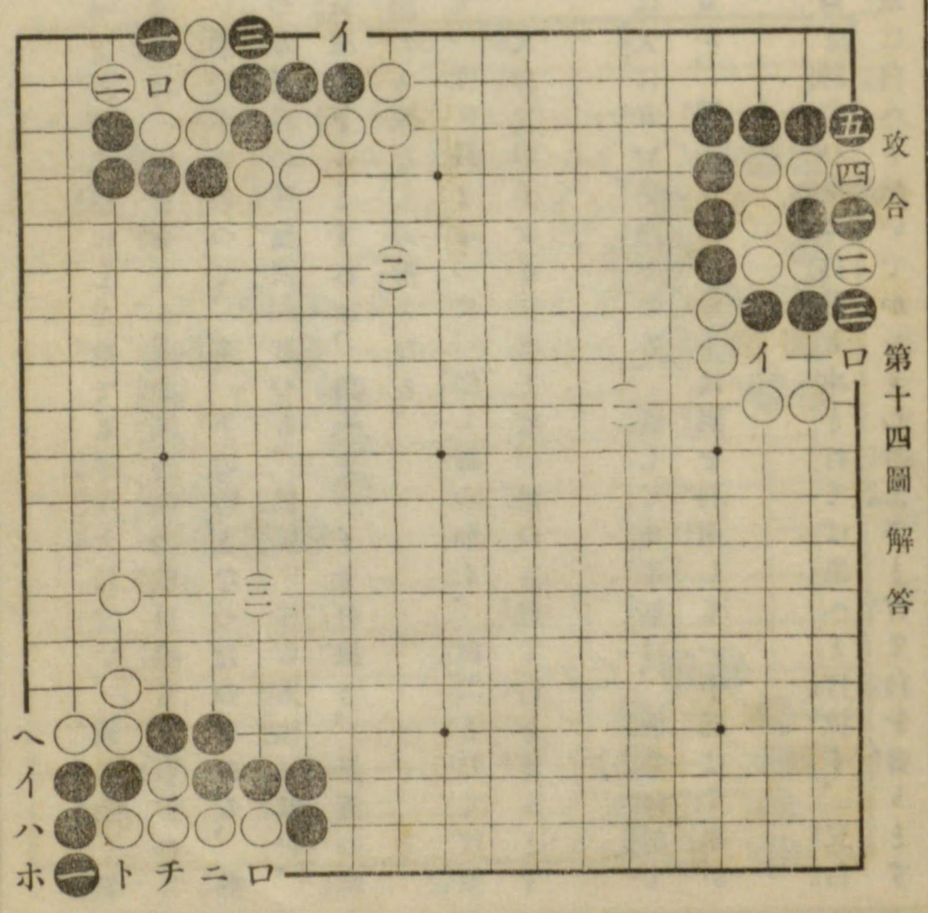
(二)黑先づ一と行びて、其手數を延ばすのである、此時白イと打てば黑ロと綽ぬ、又白イの手をハに打てば黑同じくロと綽ぬ同じく一手の勝となる。

(三)黑先攻合勝、圖の如く黑先づ一と尖み、白二の時黑三と行るのである、



此時白イと打てば、黑ロと打て白を當りとする、然るに初め黑一と尖む手を二に綽ねるとすれば白一と約へ、黑三の時白ハと盤り反對に白勝となるのである。

(四)黑先攻合勝、黑初め一の尖みは一寸面白い手筋である、即ち白二に粘ぎし時黑三と下つて黑勝、然るに黑一と尖む手をイと打てば、白二に粘ぎ黑三の時白ロと打て白勝となるのである。



第十四圖解答

第十四圖(一)黑先攻合勝、黑一と行び二目にして捨てる手段大に宜い、圖の如く黑五までの結果となつて白二手(白は一眼を有するも如斯外側の駄目殘らず塞がれて居る時は、全く二手より無い)黑三手であつて、黑一手の勝となつたのである、然るに黑一と行びて二目を捨つる手段の外如何に打つも、黑勝とする方法は無い、今一例を擧れば、一の手を只三に下るとすれば、白一と一子を打拔き、黑五の時白イ黑四の時白ロとなつて眼あり眼なしの形となる。

(二)黑先攻合勝、黑一と附けて一手の勝となつた、卽ち圖の如く、白二と打てば黑三と約へ、白を當りとなし、又白二の手をイに打てば、黑ロと打て白を當りとするのである。

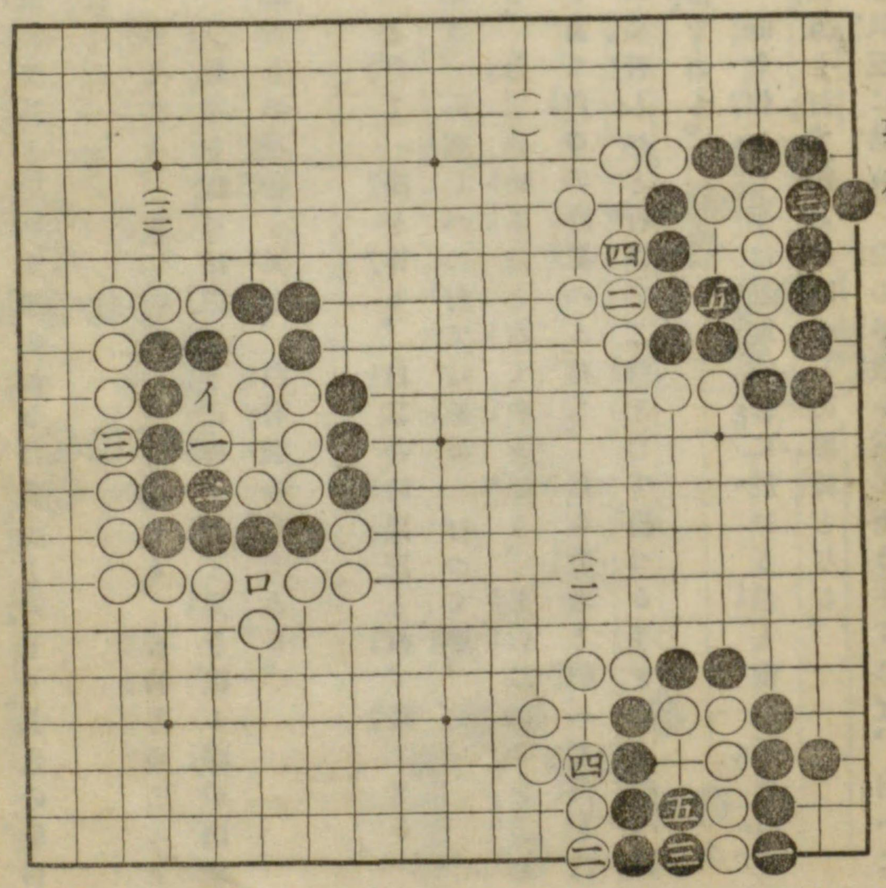
(三)黑先攻合勝、黑一の下りは大に宜い手筋である、而して此手筋は、前卷に於ても稍之れと似たる手筋はあるが、要するに、此手は隅を利用して一手延ばす事が出來るのである。

卽ち此時白イと打てば、黑ロと綽白ハ黑ニ白若しホと打てば黑へと打拔く、又白トと打てば黑チと打拔く、故に白へと粘いでかゝりし時黑チと打て白を當りとするのである。

第十五圖解答

第十五圖(一)黑先攻合勝、圖の如く黑一以下五と詰め一手の勝とする、而して此五の點は、白の手を詰めると同時に又黑自身の手も詰めて居るから、攻合に於ては餘程手數が多い時で無いと容易に詰められぬ處である。

(二)黑先攻合勝、此圖の如き、初めは白四手黑六手であつて、且其上に黑先手であるから、手を拔く



攻合　第十五圖　解答

も黑勝の樣であるが、然し黑三又五と詰める手の如きは前述と同じく共通の駄目であるから黑先漸く一手の勝となつた。

(三)白先攻合勝、白一と打て一眼を作り、黑二の時白三と詰める、此時黑若しイと打てば、白直にロと打拔き、又黑手を拔けば白よりはロと打て黑を提る事が出來るので、斯の如きは眼あり眼なしの攻合と云ひ、白有利の形である。

第十六圖解答

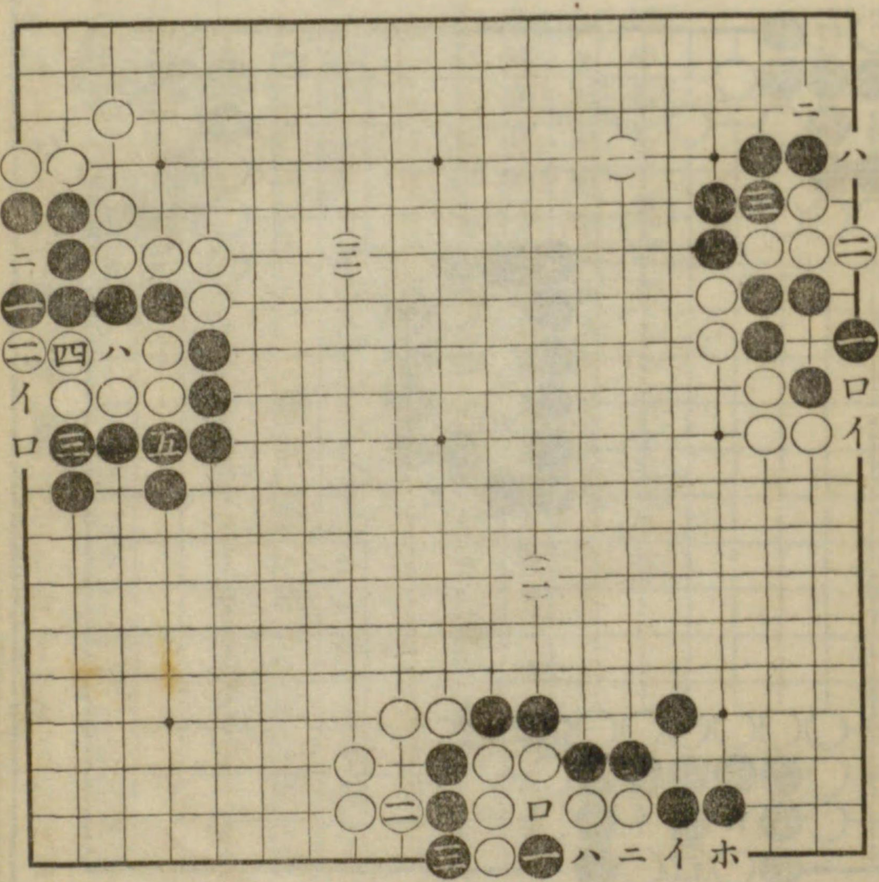
第十六圖(一)黑先攻合勝、黑一と打て一眼を作り、白二の時黑三と打て勝とする、此時白イに下れば、黑ロと粘ぎ、白若しハに打てば黑ニと打つて勝、

(二)黑先攻合勝、黑先一と置き、白二の時黑三と打て白を提る、又白二の手を若しイと綽ねるとすれば、黑三と當て白ロの時黑ハと打ち、白ニ黑ホと約へて白を二手に縮めるのである、然るに黑若しハと行びて二目として捨つる手をホと約へれば、白ハと一目を提て刼の形である。

(三)黑先攻合勝、黑一と曲り一眼を作りし手は如斯攻合に於ける最も善い手で有る白二の時黑三と詰め、白四黑五と打て眼あり眼なしの黑勝となる。

然るに黑一と一目を作る手を只三に詰め、白の手數を縮めやうとすれば、白一に

綽ね、黑五の時白四と突當り、黑イ白ニに粘ぐ、此時黑ロに打てば、白は手を拔くのである、黑猶ハと打てば白ニと打拔く可く、又黑ハの手をニに打つも白同じくハと打拔くのである、卽ち如斯は黑より此石を提る事が出來ぬと同時に又白よりも黑を提る事は出來ぬ、何故なれば、白ニと打てば黑にハと打拔かれ、又白ニをハと打てば黑にニと打拔かるゝのである。

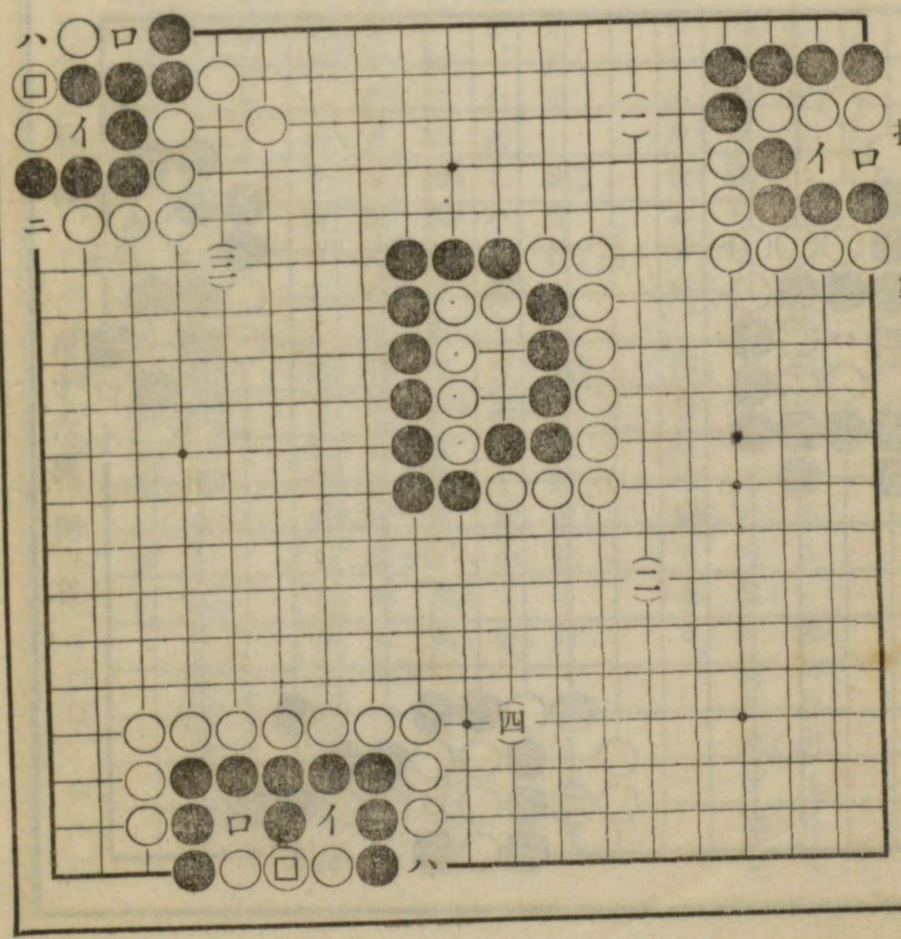


攻合　第十六圖解答

斯の如く何れよりも提る事の出來ぬ形を持と稱するのであつて、此持とは永久何れよりも侵す事の出來ない中立の形を指して云ふのである。

持

第一圖持とは前述の如く白も黒も駄目を詰める事の出來ぬ形を指して云ふのであつて、若し何れかが手を詰めれば其詰めた方が却て捉られるのである、故に持とは既に中立



の形である以上白も黒も之を自己の領分として計算する事の出來ないのである。

而して此持は左の三種の形に分れて居る。

一、双方眼無しの持。

二、双方一眼づゝの持。

三、一眼づゝの中間を無眼の石にて遮斷せられたる持。

此中一は本圖(一)(二)(三)(四)の如き形を指して云ふのである。

即ち(一)に於ける中の黒四目と中の白三目とは持の形となつて居る、故に何れでも敵の石を提らんと若しイに詰めるとすれば、直にロと打拔かるゝのである。

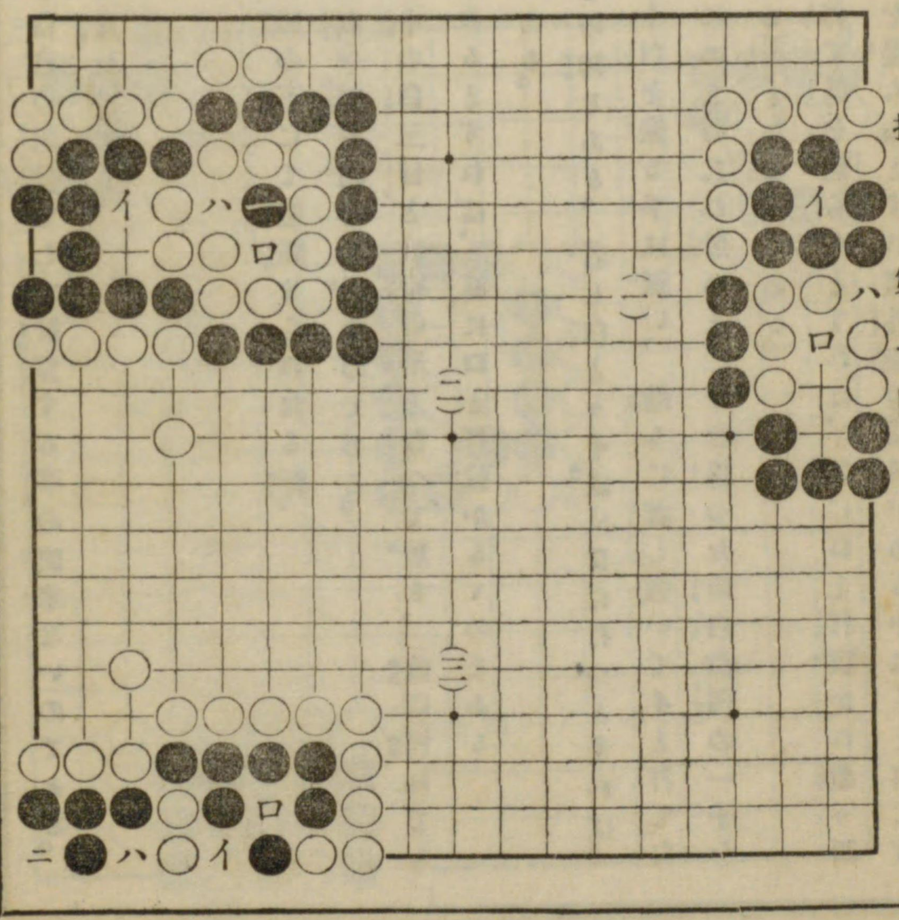
(二)同じく中の五目は持の形である。

(三)斯の如き形も同じく眼なしの持である、若し白よりイ或はロに打つとすれば、黒にハと打拔かれ、又黒よりも白を提る手は無い、然るに若し強いてイと打て白の二目を提らんとすれば、白にニと打たれ黒ハと二子を提つた時白㊀印の一子を提返しで黒却て(石を提りし爲め)死となるのである。

(四)白外側の駄目詰めて後イと打て黒を提らんとすれば、黒にロと打拔かれ曲り四目の活となる、又黒より此白を提らんとすれば外側の駄目がある中はイと打てば

此三目は提る事が出來るが、其代り白にハと約へられ黑ロの時白◎と打込み黑の全部死となるのである。

第二圖(一)双方一眼づゝを有する持である、卽ち黑はイに一眼を有し又白もロに一眼を有して居る、而してハの點は双方共通の駄目(手數)であるから、之れによつて持となつて居る、故に黑若しハに打つとすれば、白に直にイと打拔かれ、又白よりハ



持　第二圖

と打てば黑にロと打拔かるゝのである。

(二)之亦双方一眼の持である、圖の如く黑一と打て白を一眼とした、此時白イと打てば、黑ロと打ち白ハの時黑一と打込み、結局(一)と同じ形となる。

(三)此形は「一眼づゝの石の中間を無眼の石で遮斷したる持」の形である、白は只二子連立して居るのみで一眼もないが、若し黑よりイと打てば白直にロと打拔き、又ハと打つも同じくニと打拔かるゝのである、

斯の如く敵の連絡を絶つ形は非常に有利なるもので、圖の如く白は只二子のみであるが、斯く黑の連絡を絶つて居る爲めに十數子の黑と同じ勢力を持つて居る。

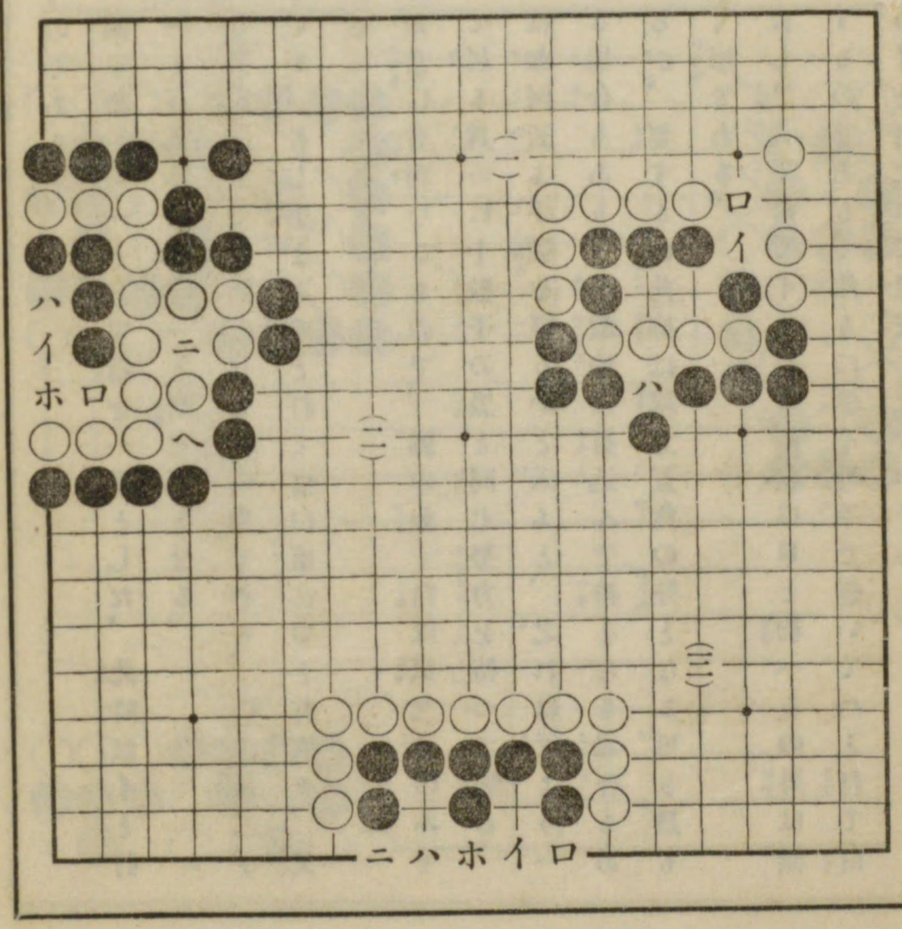
第三圖然らば、此持となるには如何云ふ手順を經るかと云ふと、之れは元より一樣で無い、攻合の結果持となる場合もあり、又敵地に打込んで持となる場合もある、又此外種々樣々の持もあるが、要するに此持は双方互角の分となる可き最も穩當なる打方によつて現はるゝ形である。

今其一例を擧げんに(一)の如き若し黑先手にてイと打てば白はロと約へるの外は無い、依て黑ハと打て之を持とするのである、然るに黑イの手で強いてハと打て白を提らんとすれば、却て白よりイと打たれて黑死となるのである。

(二)の如き又同じく黑はイと曲つて、一眼づゝの持とする、此時白ロと打つも黑ヘと打つて持の形である。

(三)白先づイと打込、黑ロの時白猶ハと打込、黑ニの時白ホと打て之を持とするのである。

(此形は持第一圖(四)にもあり併せて參照せられたし)。

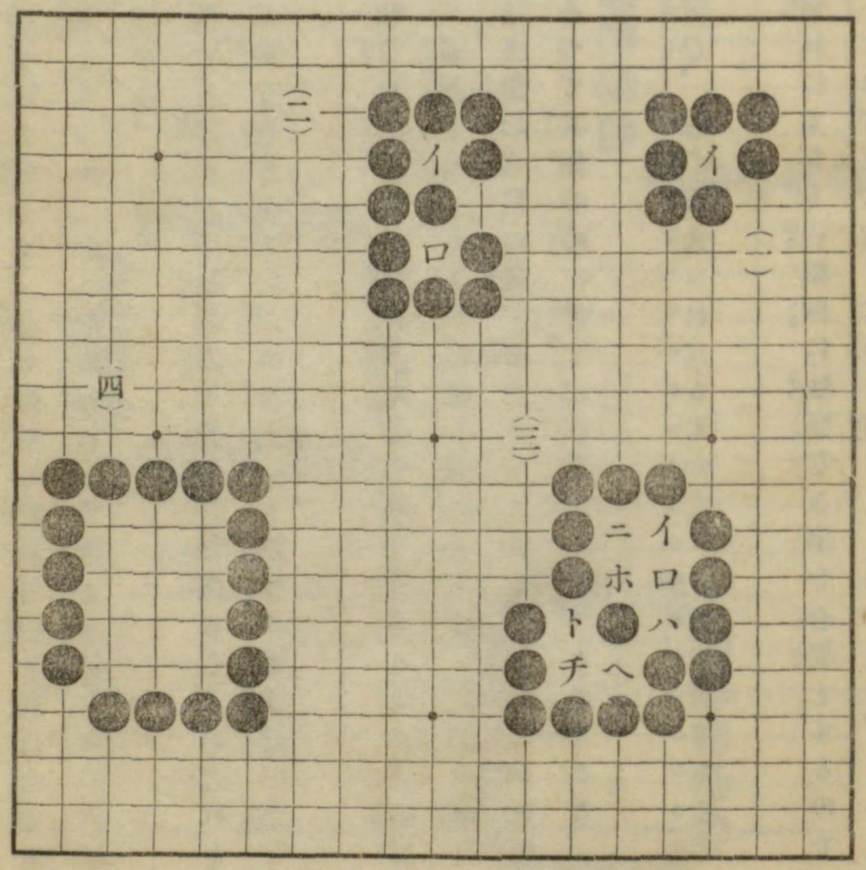


持第三圖

布石之部

地

第一圖前に種々説明したる、石取又は石を逃ぐる等の手段も畢竟終局に於て地の多からん事を專一とするのである、又布石定石其他碁に於ける總ての研究は皆此地なるものを巧に取らんとする事を目的として研究するのである、故に地は碁に於ける基礎であつて若し此地と云ふ觀念なしに打つ事



地と駄目　第一圖

は恰も一定の目的なしに事を爲すのと同じで、必ず終局の勝利は望まれぬのである、然らば此地と稱するのは何であるか、卽ち我根據にして敵より侵す事の出來ない勢力範圍を指して云ふのである。

今圖によつて之れを說明すれば(一)イ點の如き黑四方を完全に包圍せしもの之れを眼と稱し若し(二)の如くイロの二點を有するもの之れを二眼と稱する事前述の通りである。

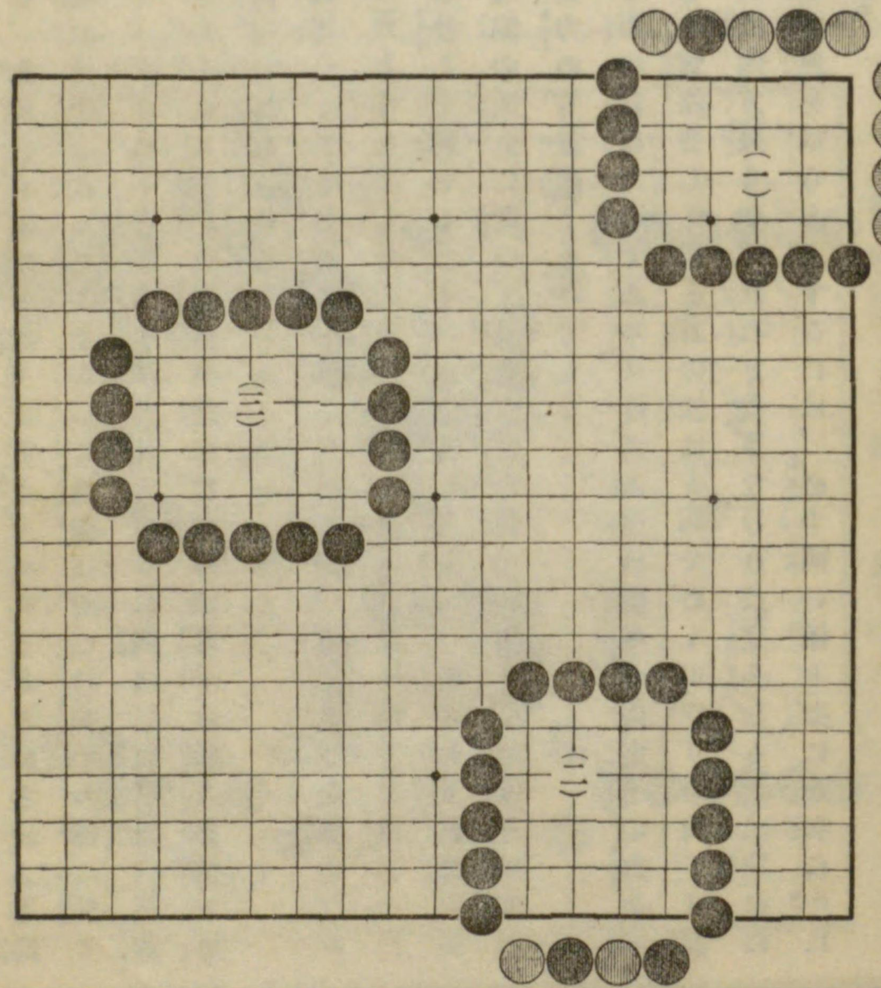
然らば(三)の如き形に於て黑は四方を包圍し中に完全なる空地を有するもの之亦眼と稱する事も出來るが然し斯く多數を有するものは眼と云はずして、之れを地と云ふのである、卽ちイ以下チまで黑は八目の地を有するのである、又眼は只死活の場合についてのみ云ふのであつて其他の時は悉く之れを地と稱するのである、猶今之を區分すれば。

「死活の時に於ては之を眼と云ひ、眼の擴大されたるもの之れを地と稱するのである」

然し眼と地との此二つは、其何れにするも皆組織に缺點なき事を必要とするので若し少しでも其間に缺點あるとすれば直に敵に其形を破らるゝのである。

(四)の如きは黑中に十二目の地を有して居るのである。

第二圖然らば此地とは如何に着手すれば包圍し得らるゝかと云へば(一)(二)(三)の如き、黑四方を包圍して其間に少しの隙も無ければ、之れを地と云ふのである、(一)は中に二十目(二)も二十目(三)も同じく二十目の地を有して居る。



地と駄目　第二圖

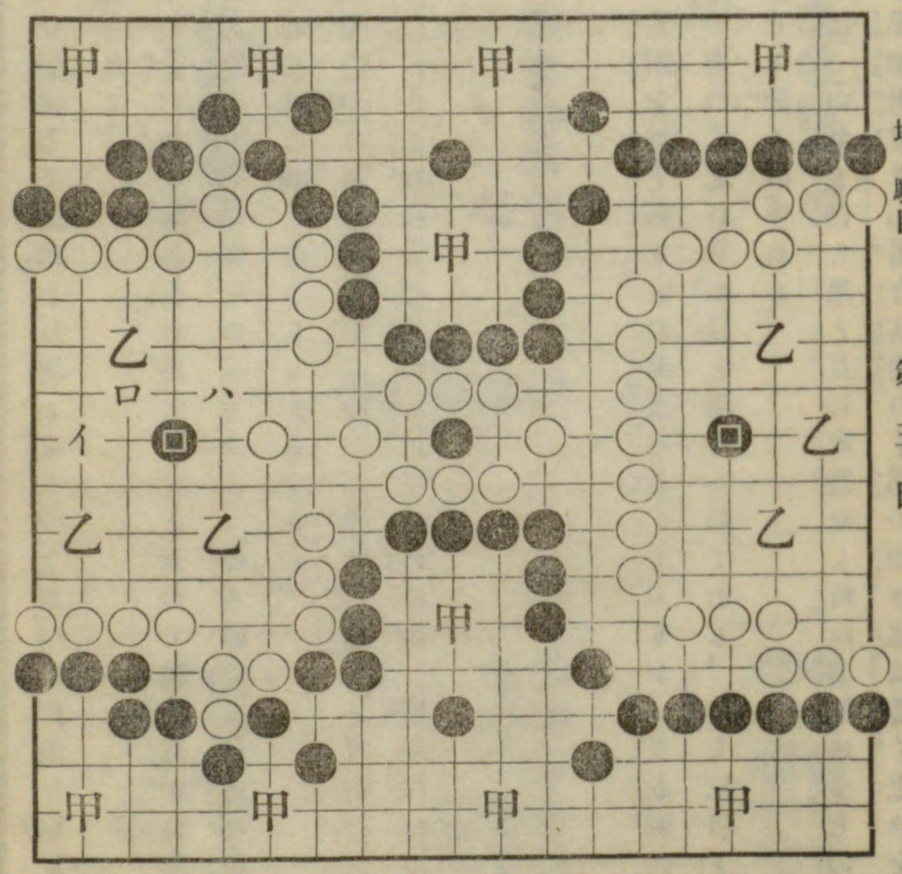
又地を作らんとするには、如何なる地點を選ぶのが最も有利であるかと云ふと第一は隅である、次は邊其次は中と云ふ順序であつて此理は四つ目殺しの部に於て説明したのと同じである、假りに一子の石を拔かんとするに隅は二着、邊は三着中は四着を要す、如斯き相違ある所以は隅及び邊は盤外の假定子の効力を借る事が出來るからである、此理は地取りに於ても全く同じである。

卽ち(一)(二)(三)の三つ共等しく二十目の地を有して居るが、然し之れを圍つて居る石の數を比較するに(一)は九子を費して二十目の地を取り(二)は十四子を費して二十目を取り(三)は十八子を費して同じく二十の地を取つて居る、斯の如く同數の地を圍まんとするにも其地點の異るに從つて其費す石の數に非常なる相違を來すのは、卽ち盤外假定子の効力の有無によるのである。

(一)に於て實際費して居る石の數は九つであつて餘の九子は盤外の假定子の力を示したのである(二)も亦同じく實際費して居る石の數は十四であるが餘りの四子は假定子である(三)に至つては其四方殘らず、我石を費さなければ完全なる地は取れぬのである、故に布石に於て地を取らんとするには、必ず隅に據り次に邊次に中に發展するのが順序である。

第三圖此圖は前卷布石に於ける第一局第五圖を稍分りやすくして掲載したのである、今双方の形を見るに地は如斯き形によつて常に作られるものである事一見明かである。

又地は第一局に於ける如き手順となり又變化となつて、固定するのであつて、其地となる迄の間には種々なる變化あり、又種々なる苦心を要するのである、卽ち其間には死活あり、攻合あり、盤り、



地と駄目　第三圖

追落、征、刧あり斯の如く種々變化して後漸くに地と定るのであつて此地を取るの巧拙は卽ち强弱の岐るゝ處である。

又圖中甲の如き處を黑の地とし乙の如き處を白の地とすると云つて何故此中は强いて侵入せざるかと云ふと到底中に活路は無いからである、卽ち强いて飛込めば飛込めぬ事もないが其入つた石は直に敵に殺さるゝからである。

今一例を擧ぐれば假りに白の地の中にある■の石について黑イに打つとすれば白にロと應ぜられ又ロに打てば白にイと應ぜられ又ハと打てば白にロと應ぜられて到底中で二眼を得る望は無いのである。

駄目

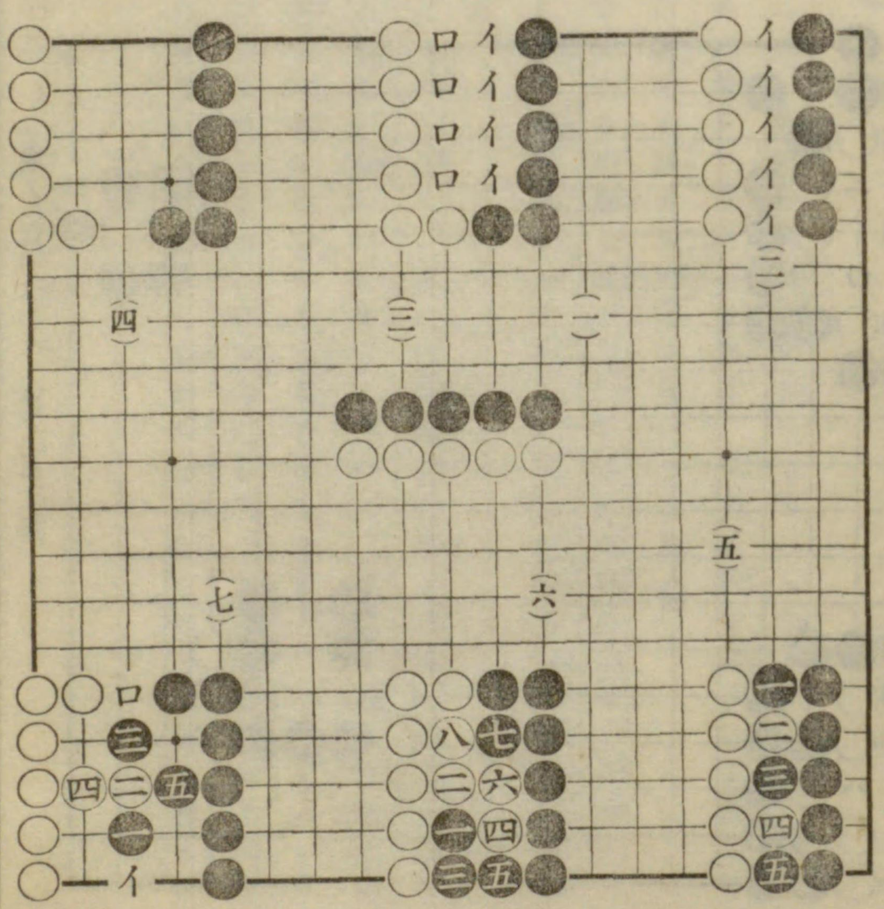
第四圖石を以て包圍せし中の空所を地と稱する事前述の如くであるが、又如何に打ても地とする事が出來ぬ處があつて之れを駄目と稱するのである、卽ち駄目とは全く利害に關係なき處を指して云ふのである。

今之れを圖によつて說明すれば(一)の如き白と黑と互に密接せし時は其間に少しの駄目も無いが(二)の如き、白と黑相對立せし場合其間のイ點の如き處は悉く之れを

駄目と云ふ、次に(三)の如きイ及びロの點も之亦駄目と稱するので黑或は白が此間に二着を續け打ざる限り一目の地も出來ないのである。

然らば(四)の如き形は如何之等はまだ駄目とは云へぬので、若し此間に双方か一着を下すとすれば一、二目の地を得らるのである。

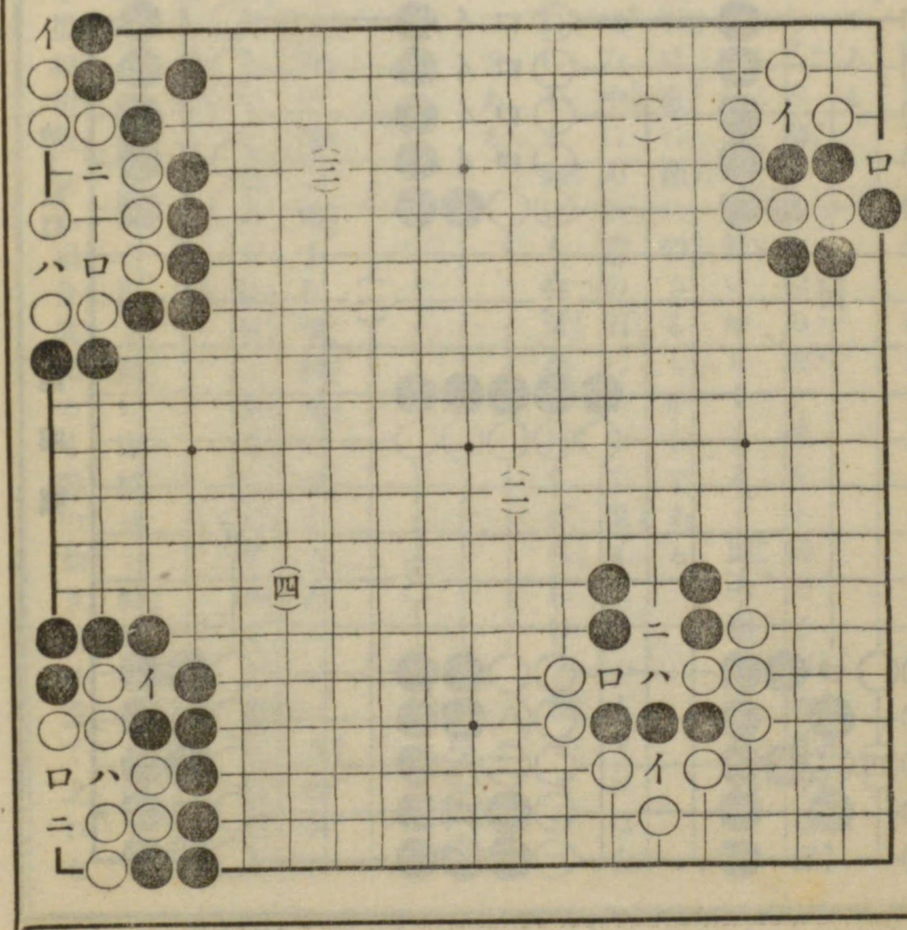
(五)は(二)の變化を示せるものであつて圖の如く黑一白二以下黑五まで互に一



着づゝ下すも何等得る處なく全く駄目を詰たに過ぎないのである。

次に(六)は(三)の變化であつて黒一以下白八まで双方に一目の地も無い。

次に(七)は(四)の變化であつて黒假りに一と先着を下したとする、此時白二に打てば黒三と附け、白四の時黒五と打つ、此時白若しイと打てば黒はロと打て一目を得又白イをロに打ば黒はイと打て二目の地を得らるゝのである。



地と駄目　第五圖

駄目の大切なる例

第五圖地を作らんとする時には、此駄目は何等の効もなさないのであるが、然し或場合には此駄目有るが爲めに提らる可き石を助け、又死の石が活となる事もある、即ち如斯きは駄目の中に於ても最も大切なるものである。

今(一)に於けるイの點は駄目ではあるが然し黒にとつては此駄目のあるが爲めに二目の黒は助かつて居る、若し此イ點が塞がつて居るとすれば直に白にロと打たれ二目の黒は提らるゝのである。

(二)若イの駄目が塞つて居れば白ロと打ち、黒ハの時白ニと打て打拔くのである。

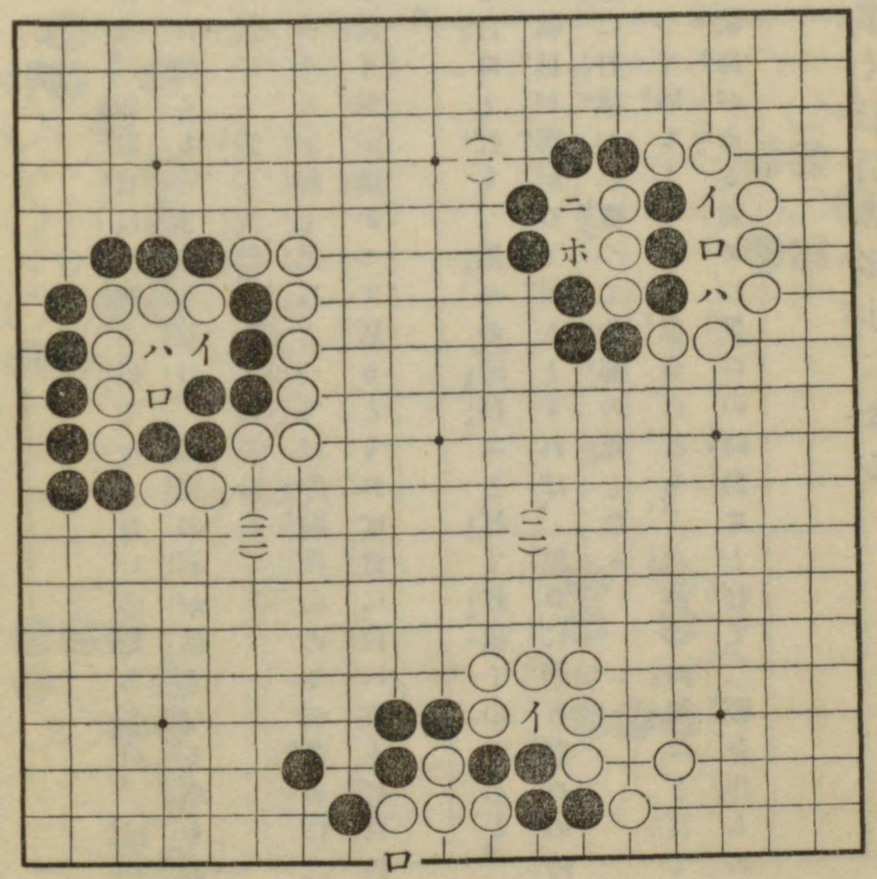
(三)白活の形であるが若しイの駄目が塞がつて居るとすれば、黒ロに切り白ハの時黒ニと切て何れかの三子は黒に打拔かれ從つて全部の死となる。

(四)亦同じく、若しイ點が塞がつて居るとすれば黒ロに打ち、白ハの時黒ニと打て白死となる、然るに白はイの駄目がある爲めに黒ロの時白ニと打て二眼を作るのである。

攻合の勝負は多く駄目の多少による

第六圖攻合には常に此駄目と離る可からざる關係を持つて居る。

卽ち(一)の如きイ、ロ、ハ、ニ、ホの五點は全くの駄目であるが、然し中に密接して居る黑三子と白三子との攻合は只此駄目の多少によつて定るのである、卽ち黑は三つの駄目(イ、ロ、ハ)を有し、白は二つの駄目(ニ、ホ)を有して居るのである故に假令此際白先手であるとするも攻合白負である、如斯く



地と駄目　第六圖

イ以下ホまでの點は地を作らんとする時は全く効は無いのであるが圖の如き形に於ては最も大切なる點である。

(二)第一線上に於ける黑と白の手數を比較するに黑は二手、白は三手であるが黑は上方イ點に一個の駄目(卽ち駄目の手數である)を有して居るから之れによつて黑先ロと綽ね一手の勝となる。

(三)白は三つの駄目を有し黑は二つの駄目を有して居る、而して此際イとロとの二つは双方共通であつて只ハの一點のみ白が多いのである、故に白先手にてイと打ち自分の駄目を詰めると同時に又黑の駄目をも詰め白二手に對する黑を一手となし之れを當りとしたのである。

無用なる駄目

第七圖(一)に於けるイ、ロ(二)に於けるイ、ロ(三)に於けるイよりトまで(四)に於けるイ、ロ、ハの如き之等は効力無き駄目にして、此點の有無は少しも石の死活、攻合及び損益に關係は無いのである、卽ち之等は駄目中の駄目とも稱す可き處で如斯き點は其一局を打終るまで白も黑も決して打つ可からざる處である、只一局を打終

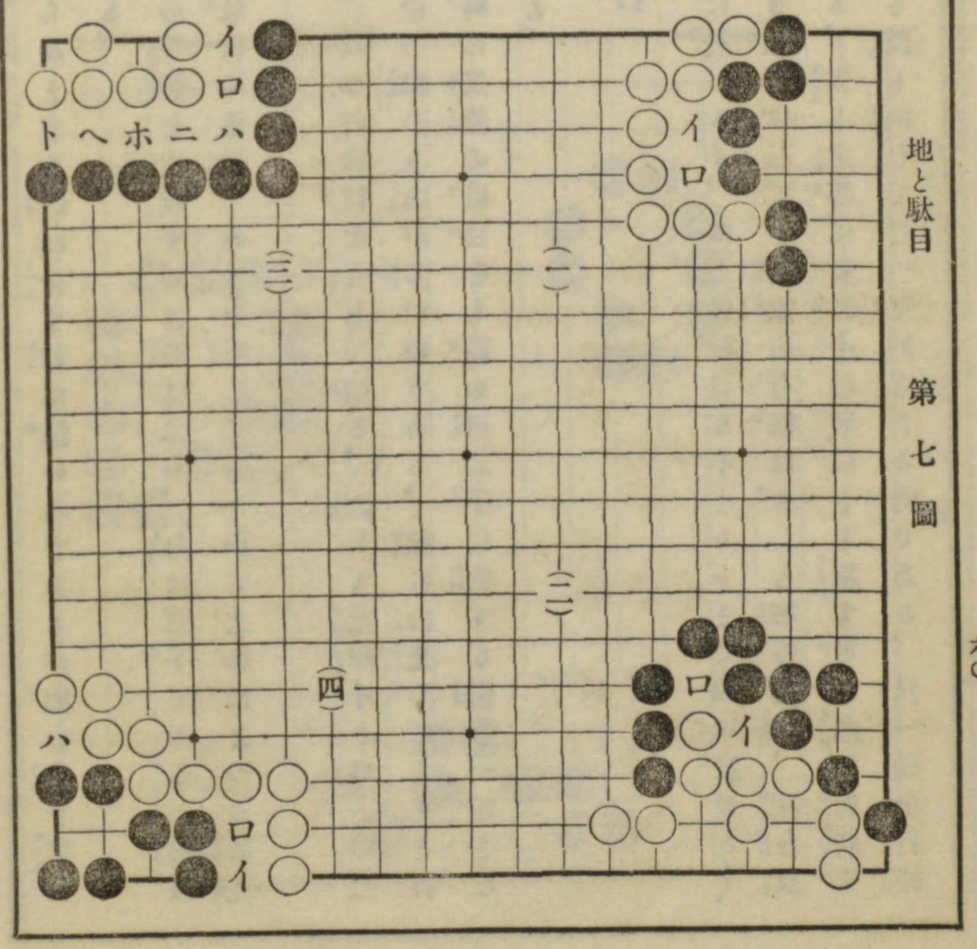
り最終勝敗を見んとする時は便宜上之を塞ぐに過ぎないのである、（此事は本卷最終に説明す）故に此駄目は大略左の二種に分て居る。

一、無用なる駄目

二、有用なる駄目

此中一は其有無にかゝはらず、其局の形勢には少しの變りも無いが、二は時としては只一つの駄目の有無によつて大石の死活に關係する事もある。

終局に於ける駄目

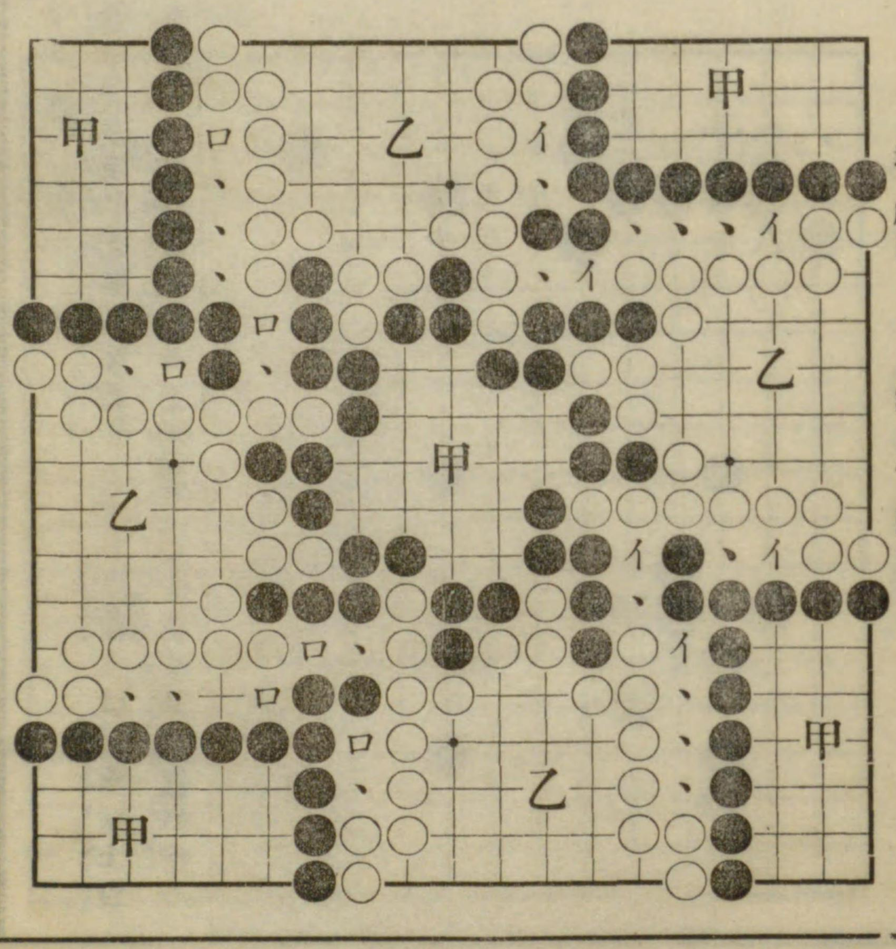


地と駄目　第七圖

第八圖此圖は前卷の五目布石、第一局第五圖を稍分り易く作り替へた形である。

而して甲及び乙は黑及び白の地であつて、圖の如く最早終局となり、打つ可き點も無い事となれば双方互に其地を比較計算し以て勝敗を定るのである。

而して圖中イ、ロ及び……の如き處は之れを終局に於ける駄目と云ふのであつて白黑何れより打つ



地と駄目　第八圖

も少しも利害に關係なき處である。

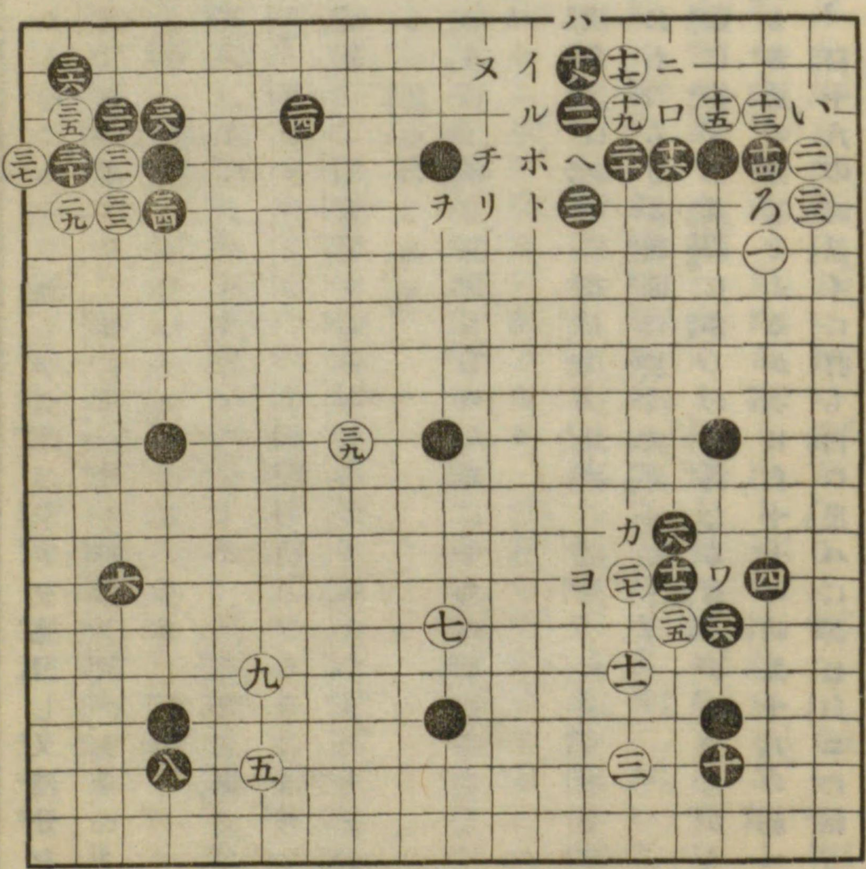
故に圖の如く一局を打終り地を作り上げ其勝敗を見んとするに當ては、便宜上白黑交る交る此點を塞ぐのみであつて、此點の打つと打たざるとは其局面には少しも影響せぬのである。

打碁

戰爭と布石の練習及び終局打上げ後の作り方

第一圖此碁は初段に對し九子を布き實際對局せし局面である、而して如斯き打碁の上には戰爭と布石との判然したる區別無く布石より戰爭に移る事もあり、又戰爭より布石に移る事もあり、又戰爭のみを以て始終する事も

白三十九手まで



第一局（第一圖）

ある、斯の如く種々に變化するものであるが然し布石及び戰爭を練習し又侵分を研究せんとするには此打碁を以て最上とする、而して之等を練習し且研究せんとするには其打碁の一々の着手を評と對照して委しく玩索するにある。

然るに之れ迄多くの新聞及び雜誌の評によれば其局の打切り後、只全局を通じて大體の評を試みるのみであつて、其一々の手について細解を附したるものは無い只其場合に應ず可き最良の手段を一、二說明せしのみであつて斯の如きは普通讀者には解し難く且其意味を知るに苦むのである。

本書は之等の缺點を補ひ且初心者に了解し易からしめん爲に平易に且最も委しく說明せんとするのである。

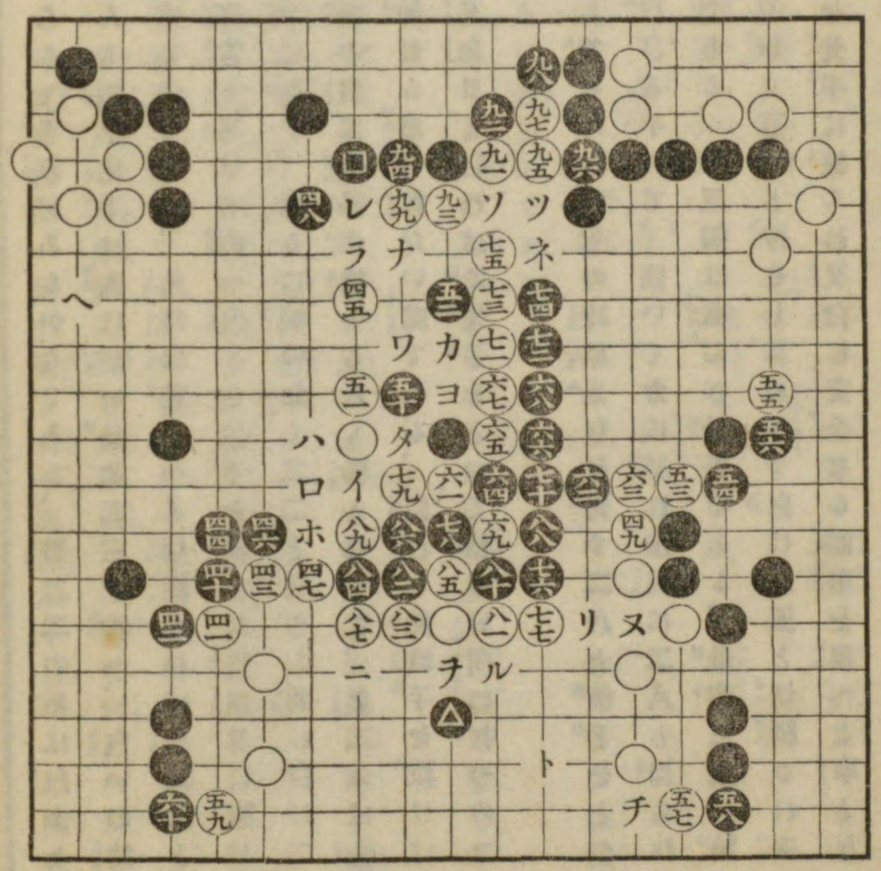
然し本書は石の死、活、切、攻合又は初めの布石及び最終の侵分、作り方等を主とするのであるから餘り枝葉にわたらざる範圍に於て講評せんとす。

偖此局黑九子を置き猶七目の敗に終りし其間に多くの緩漫なる着手があつたからである、初め黑十六までは最も普通の應答であるが次に白十七の時黑十八の約へ惡し此手は十九と上より約へ、白十八の時黑イに打ち白ロ黑ハに綽ね白ニに粘ぎし時黑ホと粘ぐを宜しとする、何故なれば、圖の如く白十九黑二十白二一の綽ね

となつて、後に白よりへと切らるゝ手筋があるからである、黑二二の粘は白よりへと切らるゝ手を防ぎしならんも然し此手は大に緩い是非二三と約へ、白いの時黑ろと連絡して一の白を分離するのである、此時白若しへと切斷すれば黑二二と綽ね、白ホ黑トに押し白チに突當り黑リと約へ白イと二子を提つた時黑ヌに附け白ハの時ヲと粘ぎ黑に少しも損は無い、然るに圖の如く二二と粘ぎし爲に白に二三と盤らるゝ事となつて此方面の白は全部連絡せらるゝ事となつた、黑二六は先づワと粘ぎ白二七の時黑カと綽ねる形に打たい處である、白若し此時手を拔けば黑猶ヨと綽ねて白の形を破り又白ヨと行れば黑先手をとつて他の好所に打つのである。

然るに圖の如く黑二六と約へし爲めに白二七の時黑止むを得ず二八と後手をとつたのである、又若し黑二八と行びる手にて、强いて力に綽れば白に二八と切られ此カの一子は分離せらるゝのである、黑三四は甚しき惡手である、是非三五に粘いで置かなければならぬ、圖の如く三四と押せし爲めに、白に三五と切斷され次に三七と打たれて三十の一子を先手に提られ又白に完全なる眼形を與へる事となつたのである。

第二圖黑四十の一間飛は普通宜い着手であるが此局面にては大に緩い、何故なれば此際黑は上に厚壯なる形を作り白之れに對し三九(前圖)と進み此模樣を破らんとせし時であるから、黑は是非三九の白を攻擊し之れによつて下の白の圍を破る事を工夫しなければならぬ。偖黑は此手段として先づ四十の飛を以てイと附けるのである、此時白はロと綽ぬるの外は無い、依



打碁　第一局（第二圖）

て黑七九に引き白八の時黑八二と單關に飛出すのである、此時白ニと打てば黑ホと打て一層劇しく攻擊し、又白二と守る手を四三に接續すれば、黑其時初めてニと侵入して白の圍みを破るのである。

黑四八之亦緩漫である、何故なれば上の黑の地は、既に其備へ充分であつて白より侵入する途は無い。

然るに猶黑は重ねて四八と守つて居るのは、堅い上にも猶堅くする手に當るのである、故に此手を以て先づへに之等も亦一種の重復する着手と云ひ得らるゝのである、黑五十、五打て、左邊黑の地を作りながら白の眼を奪ひ之を攻擊す可きである、黑五十、五二は形惡しく且不急の所である、矢張りへと打て白を攻擊するか、又は一層劇しくトに打て△の黑の活を計る處である、(トと打て活を計るの變化は後に委しく說明する)

然し白に五七と打たれし後は此トと打つの筋は消滅したのである、何故なれば此トの手の意味は白の應手によつてチと附け下に盤らんとするにあるのである、然るに白に五七と打たれし後は此盤りも無く從つて黑トと打つ筋も無いと云ふ事になるのである、白六一と附續て六五と切斷せしより、玆に忽ち戰端を開く事とな

つたのである、而して黑は此際に於ける六六着は最も考量を要す可きであつて從て一局の勝敗に關する處である。

初め白六一の時黑六二の覷き及び六四の約へが次に白六五と切斷せし時黑六六と綽ね猶六八と押せし着手は共に惡手である、先づ六六と綽ねる手にて反對に六七より綽ね白六六に行びし時黑七九と綽ね白七八の時黑タに粘ぎ白イ黑八六白八二黑八九白ホ黑ロと切斷して逆に五一、四五等の白を攻擊するを宜しとする。

次に黑六八の押しに至つては、是非六九も行び白の六五と切斷したる石を提るか又は下邊白の地內に侵入す可きである、卽ち其變化は白若し七七と飛び、下邊に黑の侵入するを防げば早先づ七九に當て、白七八の時黑猶八六と當て白八五の時黑七二と掛け白の二子を提るのである、又白七七と飛ぶ手にて、七九に引き二子を守れば、黑先づリに覷き、白又の時黑八一に附け白ルの時黑ヲと切斷して白の地を蹂躙するのである、然るに圖にある如く白より六九と綽られ、黑七十と粘がなければならぬ事となつては回の黑を逃んとする望も絕へ黑不利益である黑七二の押し亦惡手である、先づ七四と掛け白ワの時黑七八に切り白七九黑カ白ヨ黑七二白タの時黑七三と粘ぐのである、卽ち圖の如く白七五と行切りしまでの結果と

比較すれば黑大に優つて居る黑八二以下九十まではまた事小である、八二の手にて猶へと打ち、白を攻擊す可きで此手は實に此局に於ける最好の着點である、黑百の行はレに打つを宜とする、此手は百と比すれば損益に於ては一目の違ひのみであるが、然し後にソと打込み白を提る手を狙つて居る。

其變化は黑ソ白ツの時黑ネに當て白ナに打てば黑ソに打て四子を提り又白若しナの手をソに粘げば、黑ナと綽出し白ラ黑カと打て此攻合は黑の勝である。

第三圖白に一、三と打れて後は黑よりイと打つ筋は無くなつたのである、何故なれば、此時假りにイに打つとするも白に九と壓迫せられ、此一子は死となるのである。

黑十の手にて若し十一に約へ込めば、白に十二と切られ黑の二子は助かる途は無い卽ち其變化は黑十に切れば白ロに行び黑三一に綽込めば白イと打て黑を當りとなし、又黑三一と綽込む手をイに曲れば白三一に粘ぎ黑三十白八と打て、攻合白一手の勝である。

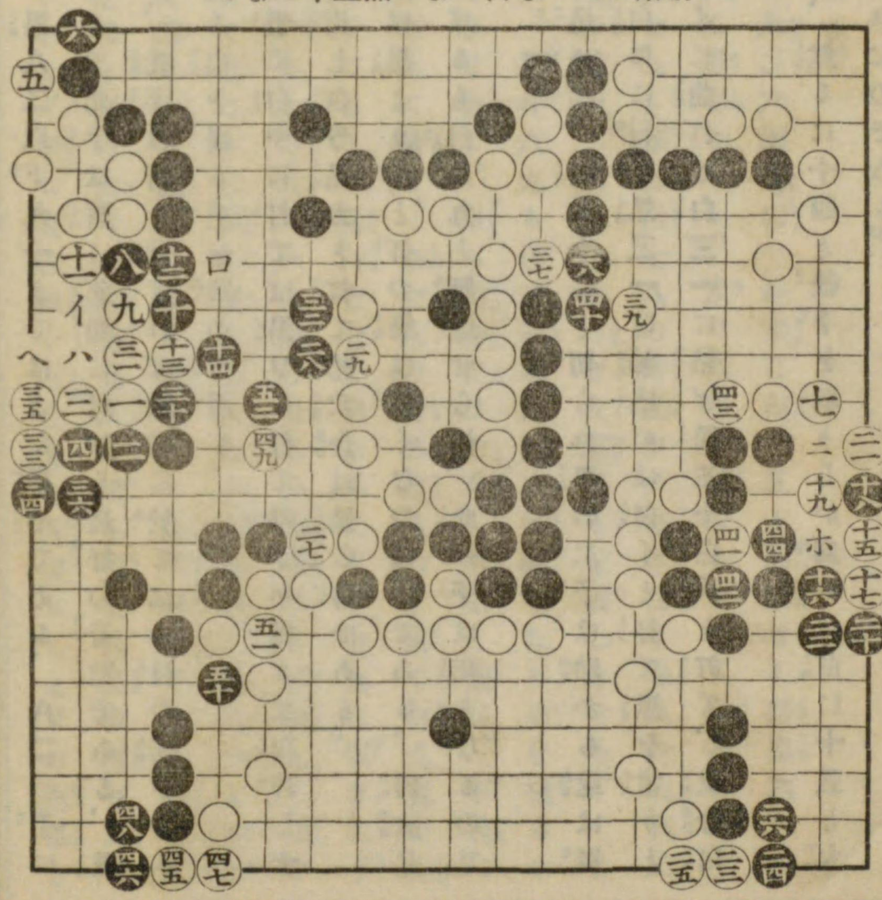
黑十四の約へはニに打つべし、然るに十四と後手を取りしが爲めに白に十五と大斜に走られ此方面の地を削られたのである。

黑十六亦々惡手である直に十七と約へ白に手段は無い、白若し強いて十六と綽込めば黑十八に打ち白二十と一子を提れば黑十九と打て圖中の白は眼を作る餘地は無いのである。

故に白は初め十六と綽込む手にて十八に引く位のものである、依て黑ホに約へ白ニの時黑十九に當て白二一の時黑手を拔き他の要點に下すのである。

卽ち圖の如き黑二二まで

前譜の つゞき 白一より黑五十二まで

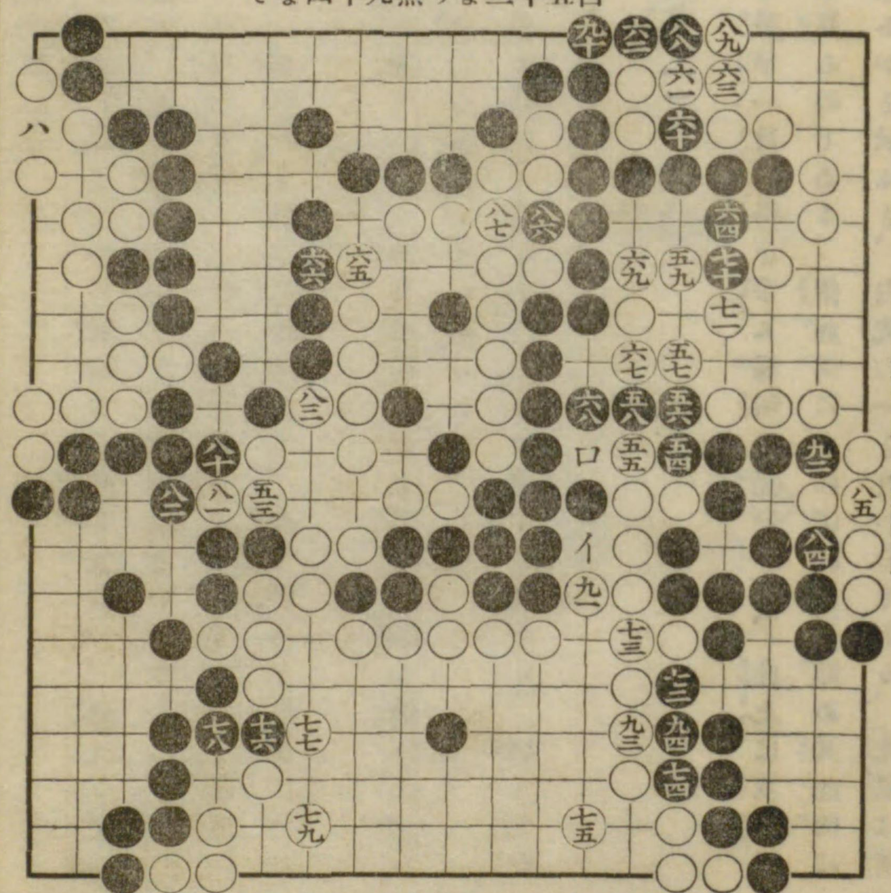


打碁　第一局（第三圖）

の結果と比すれば先手と後手の違ひである許りで無く、又損得に於ても四五目の相違がある。

白二三より黑二六まで、又白四五より黑四八までは、實戰に於ては何れの局面にても必ず見る形であつて之を白先手の綽粘と云ふ黑三二之亦小事であるへと置くを宜しとす白若し三五と打てば、黑直にイと切て此攻合は黑の勝となり、又白三五と約へる手をイに粘げば黑

白五十三より黑九十四まで



打碁　第一局（第四圖）

三五に引き、黑に七目の利益がある。

第四圖本圖は最早終局に近き爲別に之と云つて說明する處も無いが、黑は失着多かりし爲めに九子の効力を減じ、此敗勢を挽回するの望みはないのである。

又本圖白五三以下は互に二、三目乃至一、二目の損益を爭ふのみであつて以下黑九、十四と粘ぐに至つて最早一目の爭ふ可き餘地も無く、全く終局となつたのである。

而してイ點ロ點及び其他の點の如きは卽ち前に說明したる駄目、卽ち終局に於ける駄目であつて之等は損益に少しの關係も無い處である。

只斯の如き點は、最終作り上げる時に、便宜上白黑互に塞ぐのである、卽ち次圖の如し。

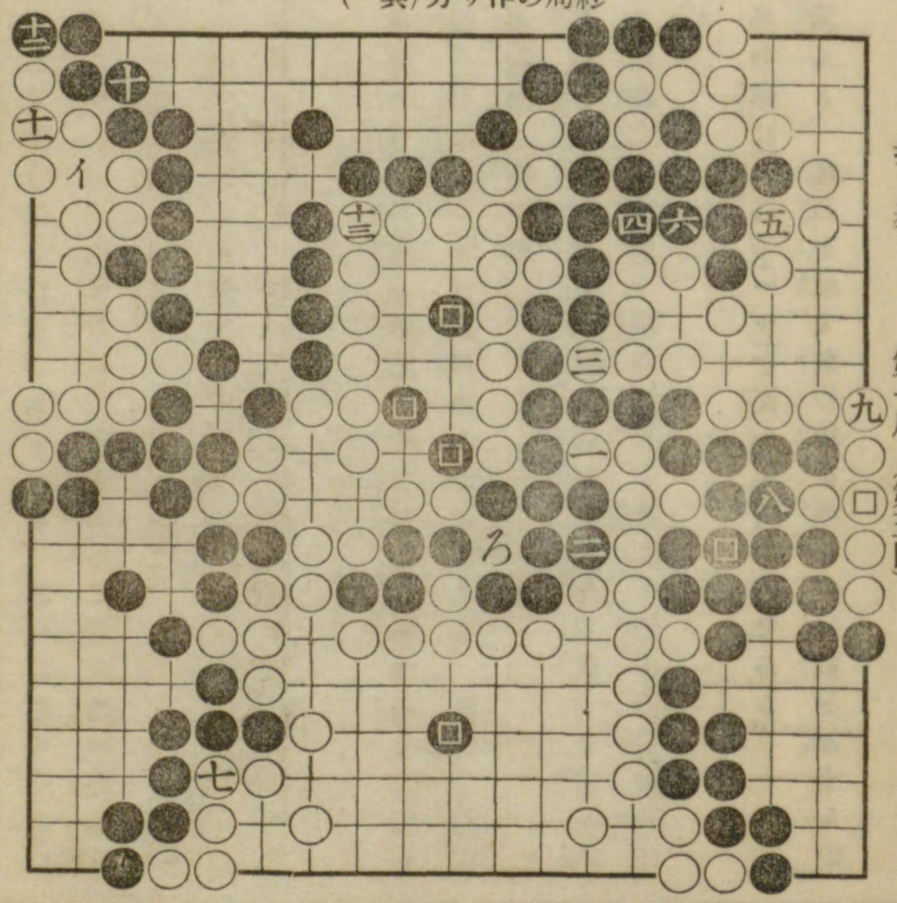
終局の作り方(其一)

第五圖本圖黑白互に打終つて最早一目の得を爭ふ場所は無いから、此上は双方互に駄目を詰めあひ、其勝敗を見るのである、偖如何にすれば駄目を詰め又如何にすれば其勝敗を見る事が出來るかと云ふと、白先づ一と打つのである、「此點は所

謂駄目であるから白黑何れより打つも隨意である」依つて黑二に詰め白三……以下白七と詰める、次に黑八と打ちし時白は是非九に粘がなければならぬのである。

若し手を拔き十三の邊に打つとすれば黑に直に九の點に打拔かるゝのである、故に斯の如き八の點は駄目の中に於ても稍有用なる方である卽ち白は此駄目によつて五目の白を提れずに居たのである。

終局の作り方(其一)



打碁　第一局（第五圖）

次に黒十白十一と粘ぎし手は双方とも十二の駄目があるから、其儘にして置いたのであるが、若し此駄目を塞ぐとすれば、白先なれば十と切て二目の黒を提り又黒先なれば十一と打て白の一目を提るのである。

白十三までにて双方全く駄目を塞ぎ終つたのである。

偖次に如何にして其勝敗を知るかと云ふと、先づ白黒は敵の提石を勘定するのである。

此提石を俗に(ハマ)と稱し此ハマの多少は其局の勝敗に非常なる關係を有して居るのである、今此局に於て黒の提り石卽ち(ハマ)は幾目あるかと云ふと、圖中イ點に於て黒の一目を提つて居る。(本局第一圖參照)

又ロに於て黒の一目を提つて居る(本局第三圖參照)卽ち合計二目を打拔いて居る此外にロの黒は殘らず死石として最終之を提去り前の二目と合して卽ち六目の(ハマ)を持つて居る譯となるのである。

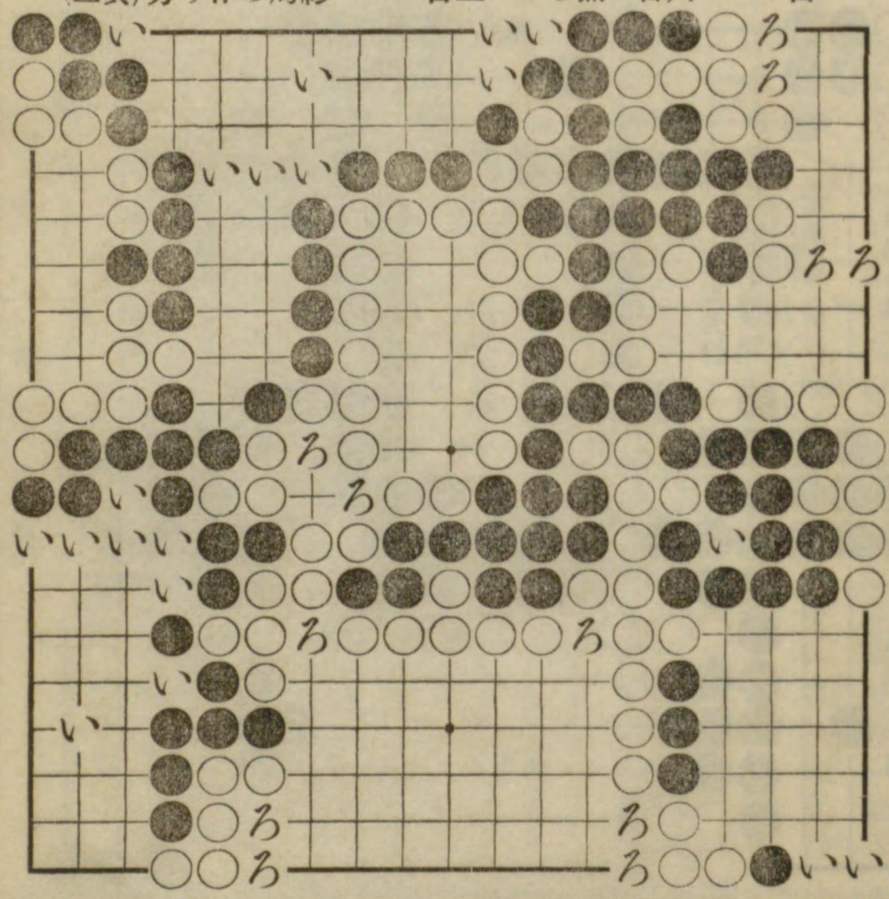
偖黒は如何にと見れば(ロ)點とろの處に二目の(ハマ)を提つて居るのである。

偖此(ハマ)は如何にす可きかと云ふと、此石を以て敵の地を塡め其目數を減ずるのである。

故に一目の提石卽ち一目の(ハマ)が多ければ夫れ丈敵の地を狹める事が出來るのである。

終局の作り方(其二)

第六圖偖盤上の(ハマ)を提上て後白は黒の地を計算し、黒は又白の地を計算するのである、其計算の法は何れの方法によるも隨意であるが只一見して敵の地が何目あるかゝ分り易くするを第一とする。卽ち白先づ黒の地を計算

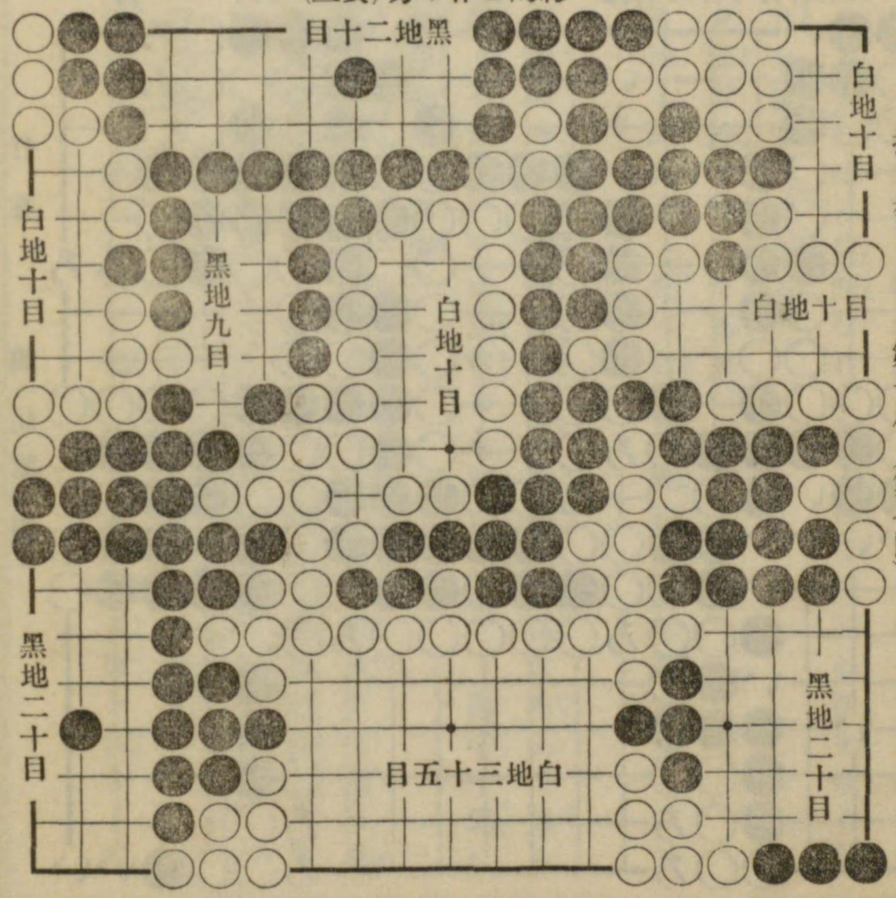


せんとするには、之を分り易くする便宜上◉の黒を殘らず提去り之に六目の(ハマ)を加へてい點を塡充するのである。

又黒も同じく白◎の石を殘らず提去り之に二目の(ハマ)を加へてろ點を塡充するのである。

扨斯の如くなつた時双方幾目あるかと云ふと次圖の如く最早一目瞭然となつた。

終局の作り方(其三)

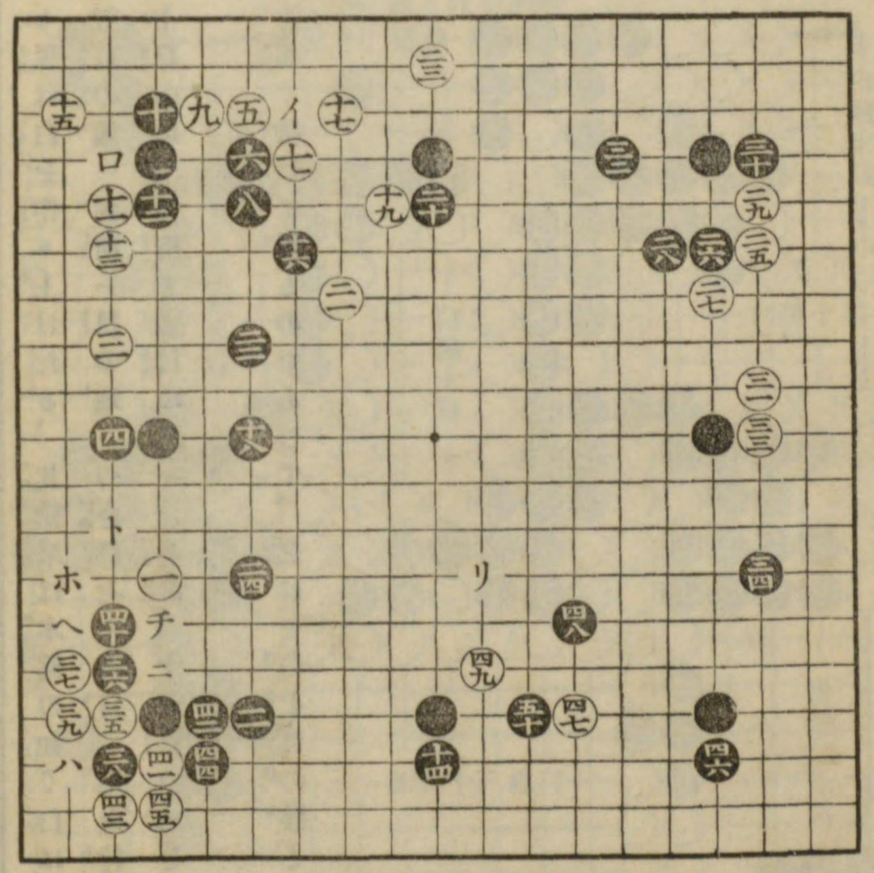


打碁　第一局(第七圖)

第七圖前圖に於て白は黒を作り黒は白を作り上けたる、其結果は本圖の如く白は十目の地を四箇所に持ち三十五目の地一箇所一目の地一つ合計七十六目の地を持つて居る、之れに對し黒は二十目の地三箇所と九目の地一つ合計六十九目の地を持つて居る。

卽ち差引白は黒より七目の地を多く持つて居るのであつて、之れを白七目の勝と云ふ。

第一圖黑四の手は別に惡手と云ふ程では無いが八目も置いて居る碁としては、先づ穩かにイと守つて置くを宜しとする、何故なれば置碁の法として攻むるよりは、先づ守ると云ふ方を先にするのであつて、圖に於ける四の下りは一及び三の白を攻めんとするに反し、イの大桂馬は攻めんとするよりは先づ隅の置石と連絡をとり守らんとする意味を持て居る。



打碁　第二局（第一圖）

黑十四はロと約へ隅を守り此石の眼を作つて置く方が宜い、十四の下りも大場には相違ないが之れも前述の意味と同じく先づ守りを先とするのである、然るに斯く十四と下りし爲めに直に白に十五と桂走せられて、黑は其眼形を奪はるゝ事となつた。

黑二四の大帽子は一見非常に勢の宜さそうな手であるが如斯き手は只虛勢を張ると云ふのみで少しも實益は無い、先づ穩かに三六と尖んで隅を占領し而して一の白を攻擊する方が宜い。

白に三五と附られし以後黑の此隅に於ける數着は最も再考す可き處である。先づ初め黑三六は、穩かに三八と隅から約へて置く可きで、其時白强いて四一と切違ひ、黑四四の時白四五と下れば、黑四三と約へて白の二子を提るのである、又白四一の切りを三六と引けば、黑八に下り、先づ隅を占領して後徐々に白を攻擊するのである。

黑四十の行はニに粘ぎ、白四十に打てば黑八と約へ又白四十を八に打てば、黑四三に行び、白四十の時黑ホに覗き白へ黑トと尖み、白の眼を奪ひ之を攻擊するのである、又白八と打つ手を四一と切れば、黑先づ八と約へ、白四十の時黑四四と

一目を提て之亦黑惡しくない。

然るに圖の如く黑は四十と行びしが爲めに、白に四一と切斷され以下白に四三と三八の一目を提らるゝ事となつて、黑損の形となつた。

次に黑四二と粘ぐ手を、若し四四と當れば、白ニに切り黑四五の時白チに粘ぎ、三六、四十の二子を提らるゝのである、之等は皆初め黑四十の惡手によつて此結果を來したのである。

黑四八の帽子大に宜い、何故なれば此手は二四の時と異り白より三五と附られ隅にて振替はらるゝ意味があるが、此場合に於ては既に黑は四六と隅を守り此方面は白より趣向せらるゝの餘地もないから、斯く四八と壓迫を加へたのである。

然るに黑五十に至つては先きの四八と意義一貫せず、何故なれば先きの四八は劇しく白を攻擊せんとするに反して、此五十の手は只四七の一子丈を提ると云ふ意味の着手であるからである。

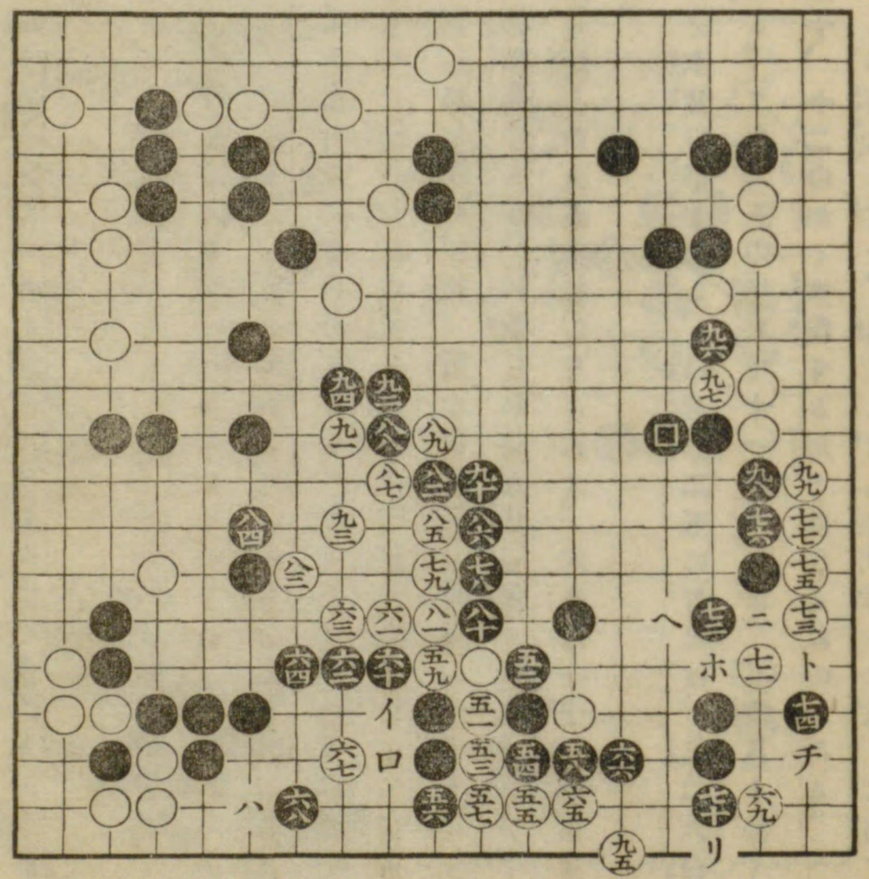
此手にて是非四八の趣向を追ひ劇しくリと攻擊すべき處である。

第二圖黑五二の手にて五三の處に打てば、白に五二と打たれ折角取らんとせし前譜四七の白を接續せらるゝ事となるから、止むを得ず黑五二と打たのであるが圖の如く白に五三、五五と打たれては、其結果矢張り黑損である。

白六七と打込みし手段は黑若しイ或はロと粘げば白は後にハと打て接續する利益を持て居るのである。

然るに黑六八の應手は最も手强き好手であつて、斯くなつては白の六七の一着は全く其効を奏しなかつたのである。

黑七二の尖は此場合に限りニと突當て白の眼を奪



打碁　第二局（第二圖）

ひ之を死とする手段もある、其變化は白若しホと出れば、黑へに飛び白トに下れば、黑チと打て眼無しとなる。

然し此ニと突當る手は、常には甚だ危險の着手であつて、若し上方に黑の五二、五四等數子が無い時は却て黑は分離せられ非常に損をするのである、故に斯の如き手はよく〳〵其場合を考へなければならぬ黑七六以下八二まで白を壓迫し且攻擊しながら中に地を作らんとする趣向大に宜いのである、然し黑七八の時には劇しく八一と切り白八十の時黑七九と行び白七八黑八五白八六黑八二と行びて白の六一、六三の二子を提り此方面に地を作れば猶一層の好結果を得るのである。

黑九四と白九五との交換は、黑稍損である、何故なれば九四の曲りは上方及び下方に於て少しの得も無い、之に反し白九五は後にリと打て、六九の一子を逃出す利益を持つて居るからである。

第三圖黑八は九の處に粘置くを本當の形とする、白若し二五に打てば、黑二六白二七の時黑十一と打て隅を守る、又白二五の手にて十一に飛べば、其時八と粘ぐので斯くなれば圖に於ける黑十、十二の如く重復する形とはならぬのである。

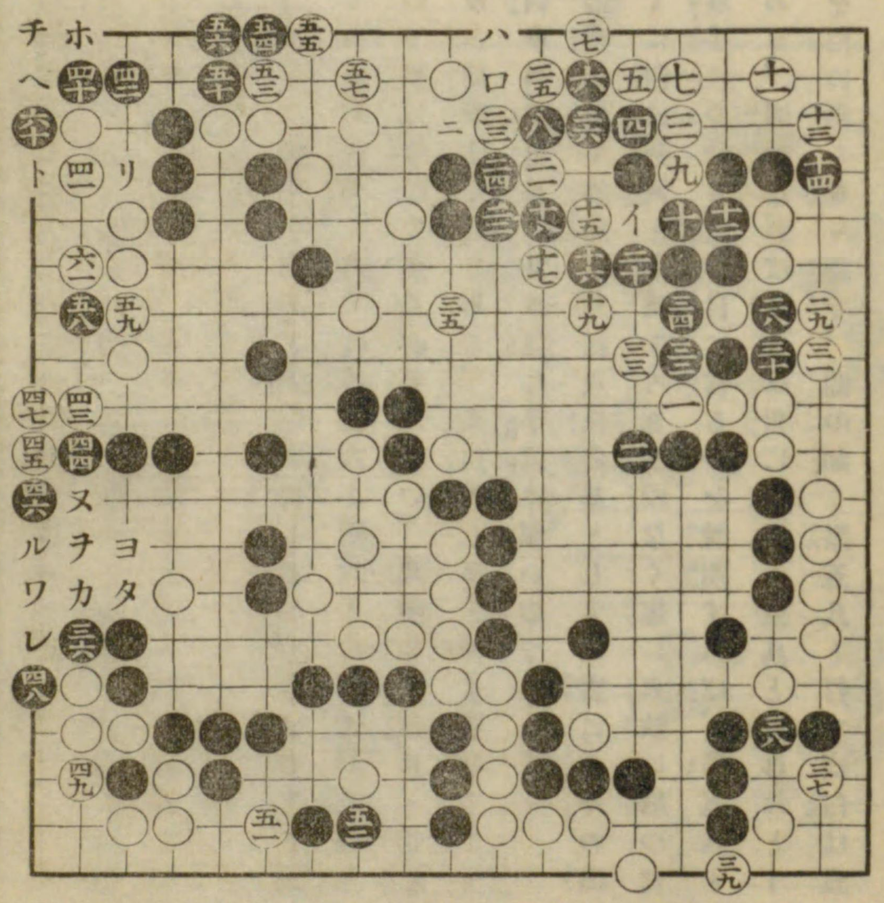
黑十六と附け次に十八と切りし手筋大に宜い、然るに若し此附切りを只イに粘ぐ

とすれば、白に直に十九と飛ばれ、黑は眼無しの形となるのである。

黑二四はロに打ち、白ハの時黑二五に粘ぎ、白ニの時黑二四と切て二目を提る方が圖に比して稍優つて居る。

如斯き小事も時としては一局の勝敗に關する事もある。

黑三六の約へ大なり、白も此好點を二七の手あたりで打て置かなかつたのは不覺である。



打碁　第二局（第三圖）

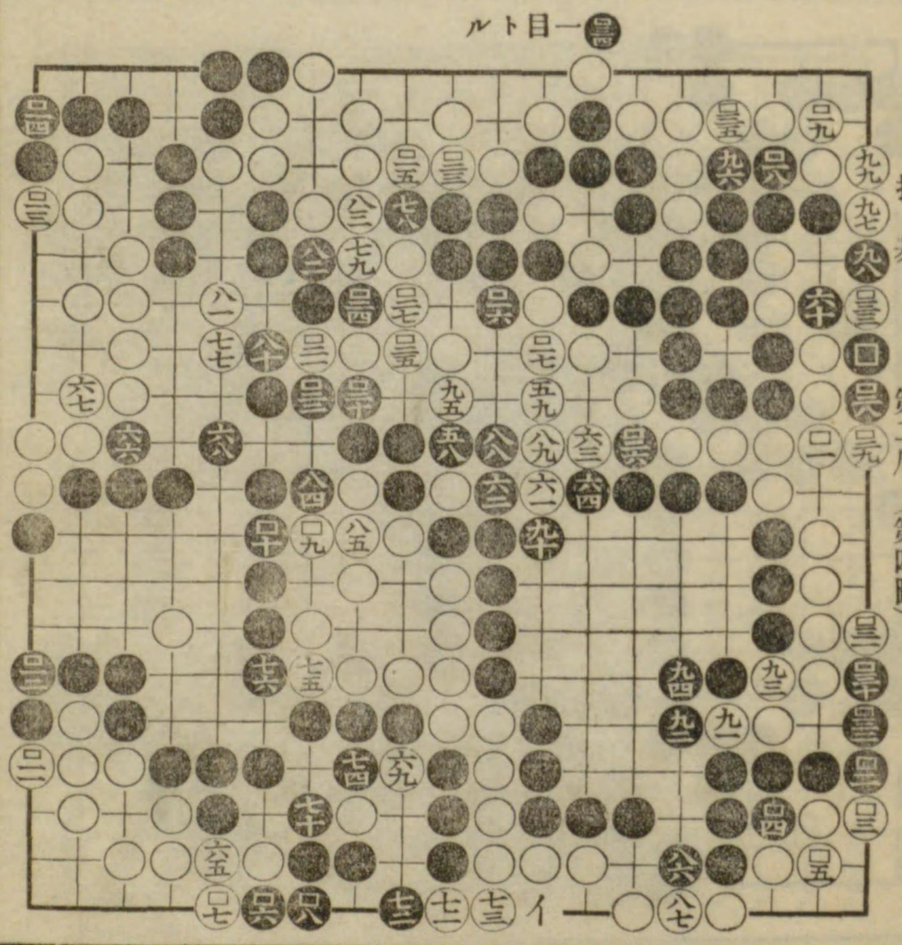
圖の如く早く黑に此好點を占領さるゝ事となつては最早黑勝勢である。黑四十と打ちし時白四一の引にて、若し四二に打てば黑四一に附け、白ホの時黑へと行びて二目にし、白六十の時黑トに打ち、白チの時黑リと粘ぎ隅を捨つる代りとして邊境の白の三目を殺すのである。

黑五十の時に當つて圖中左邊の白に四五、四七と綽粘がれし場合普通は黑ヌと粘いで置かなければならぬのであるが此形に於ては黑三六と四六との距離が狹い上に黑には四八の綽まであるので別に守つて置く必要は無い。其變化は白ヌと切れば、黑ルに行び白ヲの時黑ワと接續するのである、又白若しヲと押す手をワより打てば黑ヲと行び白カ黑ヨ白タの時黑レと粘ぎ白に手段は無いのである。

第四圖黑五八より以下少しの損も無く終局せしは八目の碁としては實に上々の出來であつて、斯の如くなつては白は如何とも爲す可き手段なく遂に大敗に終つたのである、今此中二、三の着手について其幾目に當るかを說明すれば、黑五八と當てし手は先手一目の得である、何故なれば若し反對に白より五八と打れたとすれば五九の一點丈多くの地を白に得らるゝ譯で、圖の如く黑五八と打てば白は五九と我地內に一子を入れなければならぬのである。

白七一と綽ね七三と粘ぎし手は三目の利益有る手である、何故なれば圖の如く黑七二と打ちしまでの結果と又白七一を黑より七三と綽られたとして白イ黑七一と粘ぐ、結果と比較すれば明かである即ち白イに一目の地を減ずる上に黑は七四、七十の二手を要せず合して三目の利となるのである。

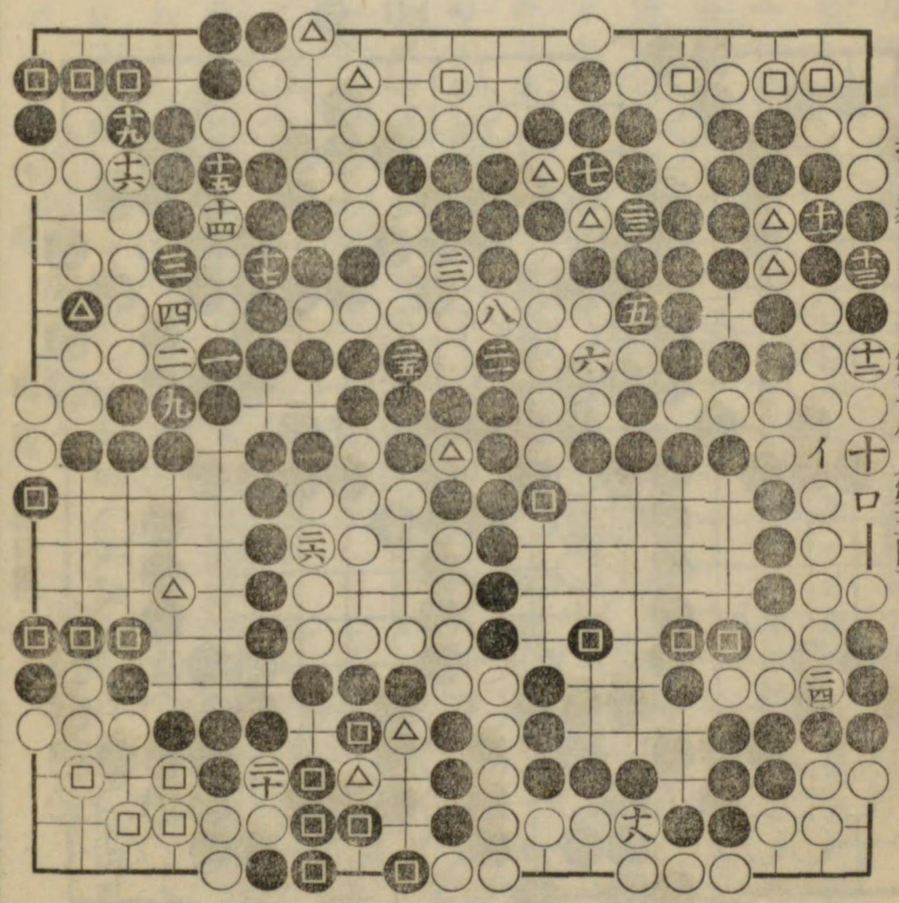
凡て終局侵分の損益を計るには、常に斯の如く計算すれば宜いのである、



打碁第二局（第四圖）

而して以上二着の如きは其中最も分り易く、又最も小なるものを提て説明したのであるが、此他終局に於て中一着十數目の利益ある手もある。夫等は追々に説明する事として先づ以上二例に止めて置く。

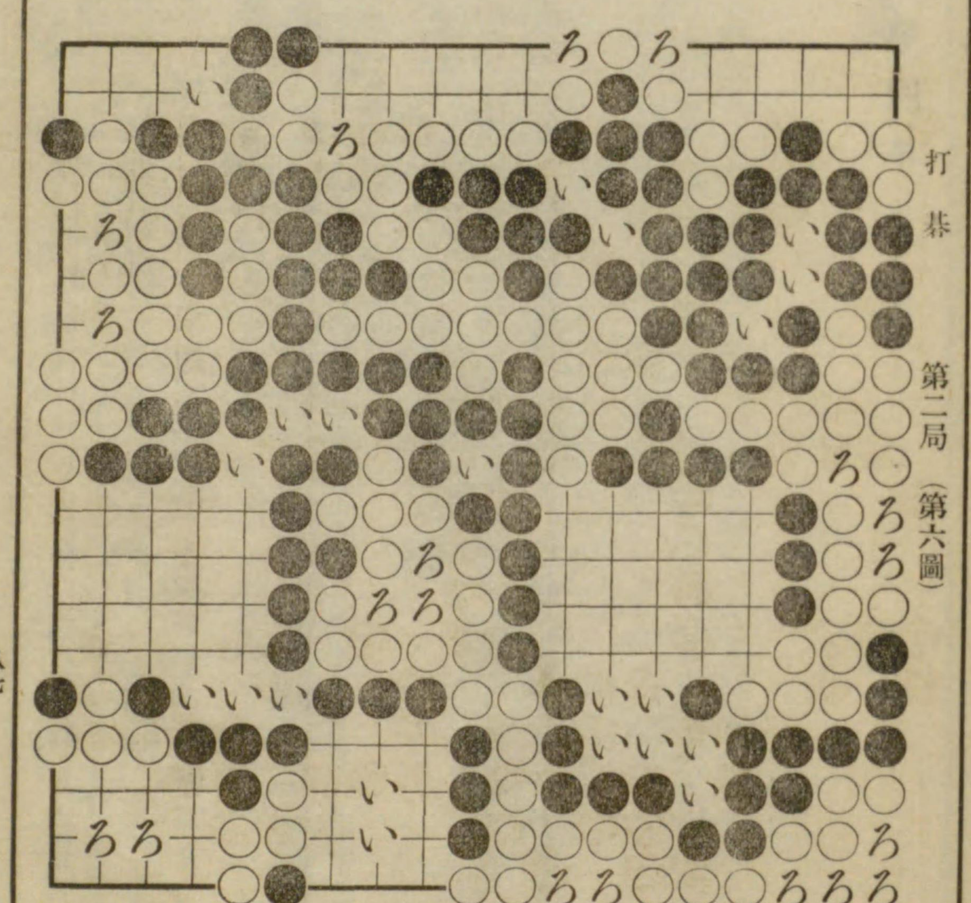
第五圖本圖終局の作り方は前の九子の實戰に於て既に殆んど説明したが猶茲に再説すれば、黒一以下白二六までは互に交る交る終局の駄目を塡充し



打碁

第二局（第五圖）

たのであつて、此中白十の手の如きは後に十二の駄目が塡まると、黒より十と置かれ、白イの時黒ロに行びて、此石の眼を奪はるを防いだのである。又圖中△は互に死石として提去るのであつて□は地を分り易くする便宜上提る事亦前と同じである。第六圖前圖に於ける提り石を以て、黒白互に敵の地をい及びろと塞げば、卽ち本圖の如き形となるのであつて、此結果は白



打碁

第二局（第六圖）

の地三十三に對する黑五十七卽ち差引二十四目の違ひである、故に如斯きは黑二十四目の勝とする筈であるが、之を黑中押勝と名けしは何故かと云ふと、碁に中押の勝と幾目の勝との二種ある、而して此二種は多く其勝數の多少によつて異るので今猶之を區別すれば卽ち左の如くである。

幾目勝　最終互に地を比較し十七目以下の勝敗の時之を幾目の勝と云ふ(卽ち井目の打碁の時白七目勝とせし類)

中押勝　一、最終まで打つも若し十七目以上の勝敗の時、

二、又十七目以下の勝敗に於ても一方中盤に於て其局を放棄せし時、

三、又死活攻合等に於て大石を提られ同じく中途にて其局を放棄せし時、

之を中押勝と云ふのである。

新式圍碁寶典　第四　終

新式圍碁寶典

第一卷目次

○圍碁之沿革附歷代本因坊系統○對局作法○碁器、碁盤、碁石、碁笥○手合二十五目より互先まで○局面解說○碁とは如何なるもの？●戰爭の部○着手の活力○四つ目殺し○石の連續と切斷○提り○逃及び粘○四つ目殺し、提、逃、粘の實例○提返しと打替○征○攻合○門○二十五目の實戰

第二卷目次

●戰爭の部○石の死活○死○活○攻合○押つぶし○追落○盤○死○活○二十五目の實戰●布石の部○石の活動○行立　下り、引、曲り、押、約、覷○尖　雁行、綽、綽卷、二段綽、尖附、約、覷○飛　一間、二間、三間飛、小、大、大々桂馬、飛附、覷○行　尖、飛の各得失

第三卷目次

○一着を下さんとするに當り其手の善惡を知る平易なる秘訣○連絡せざる形と重復する形○重復する形の實例○申分ない形の實例○不連續と重復の比較○征は最適例○二十五目の實例●戰爭之部○攻合○押つぶしと追落し○死○活○實戰二十五目●布石之部○(聖目)九目布石○五目布石

第四卷目次

●戰爭之部○刼○盤○點○活○二十目の實戰○練習問題攻合○同解答○持●布石之部○地と駄目○駄目○駄目の大切なる例○攻合の勝負は多く駄目の多少による○無用なる駄目○終局に於ける駄目●打碁之部○戰爭と布石の練習及終局の打上げ作り方(九子、八子)

●説明の新式にして何人の頭脳にも入り易きが本書の特長○
鈴木五段が七ケ年の努力を以て成る●碁界代表的模範棋書

科學的解釋
新式圍碁寶典

和装頗美本
第一、二、四、六 定價各金六拾錢
第三、五 各定價金七拾錢
郵送料各金四錢

本書は圍碁の要素を根本的に解剖し論理の透徹と意義の明白とを期せる（科學的説明）斯界空前無比の名著なり

近刊第五卷目次（第六卷續刊）
●戰爭の部○練習問題活○同解答○練習問題死○同解答○練習問題切○同解答
○二十目の實戰
●布石の部　八目（四局）四目（四局）
獨特の解剖説明は本書の特長にして科學的解釋に依り何人も碁道の奥秘に通ずべし
○本卷々愈碁道の極意に入門す○
本書を連續研究せば必ず何人も一躍三四目の上達は勿論連戰連勝を期すべし

●本書第一、第二卷世評一斑（誰でも一册讀めば必ず直に碁が打てる「手ほどき」入門の卷なり）一、二各金六拾錢　送料各金四錢
▲東京朝日　圍碁に關する從來の定石布石の書と趣を異にし新式の解釋を施し初心のものに領解し易きを旨としたり自ら科學的解釋といひ模範棋書と稱す著者の自信する所を見るべし
▲時事　著者が多年の實驗上原理に依り未だ學ばざる初心者にも解し易く組織的に分類し漸次易より難に及び圍碁の沿革對局作法等より活、死、劫、攻合、盤、二十五目迄の實戰か懇切に解説したるもの全く獨習の良書とす亦多少心得あるものは本手筋を會得するに足るべし
▲萬朝　棋壇に旭將軍の稱ある鈴木五段が多年工夫して初心者が進々上達すべきやう順序よく圍碁の獨習速成法を講じ行かんとするもの、多くの碁書中最も意を得たる者の一也●第一卷より進んで實戰の部と布石の部を篠理整然と易より難に入り簡より詳に及び能く圍碁の神髄を説き石の死活、石の活動を一讀了解せしむるの獨習自在の書

發行所　東京　大阪屋號　東京　模範棋書發行所　斯文館

戰法」を創定せし其機略縱横の秘術に依り戰敗を轉じ勝利を得せしむる未曾有の初陣快著

今春『萬朝報』の棋客を驚倒せし「圍碁戰法」に於て近世の怪傑野澤五段の先番を破り滿天下の棋界を震撼せる瀨越四段は「敵陣を襲撃して之を突破する」

圍碁襲撃戰法

四段瀨越憲作先生處女作

送定和料價裝金美本四拾一錢錢冊

進んで蓄せる口、ヨ、で、も、ない、形なく、局數も亦二十局を超ゆるもの、面ゆい、書が無い、何書も古今未曾有の口傳、「秘」の、い、本書は布石の方法を説明せる書が無いでもない、送定和料價裝金美本圓箱入貳拾一錢冊

互圍先碁布石攻合法

方圓社長七段中川龜三郎師著

一六十餘局

敵を掌上に翻弄する迄の大著述で秘術を披瀝し二年の月日を費やして漸く大成せる古今未曾有の極意を會得し機略縱横、黑白の造作ない事である、熟讀翫味せば何人も百戰百勝疑なき將棋、段、香落等抜集成の六箱に略圖を解説せる者に卒業せば百戰、跡、通、の、故、飛、香落、二枚落、四枚落、五枚落、定跡中に最も巧妙を極めたる者五十餘種を選抜集成し之に定、落、飛、車、角、川、井、七、段、香落等より平手に至る迄各流各種を網羅し之を卒業せば百戰百勝疑なき將棋、段、が親切丁寧に説明し上達の秘訣なり

將棋百戰百勝

送定和料價裝金美本五拾四錢錢冊

最新刊

名人小野五平先生校閲
七段川井五平先生講述

館文斯　書碁範模所行發　野飯九保神南田神京東　番三二七七二京東替振　號屋阪大　町賴北橋本日京東　番五七三一京東替振　所行發

六段雁金準一棋伯畢世の一大新著述

新刊 攻合布石 置碁必勝法 和裝美本箱入二冊 定價金壹圓 送料金八錢

○局數七十餘局、日子を費す事實に參ケ年
著者最近實戰 陣立の方法、攻合の手段 置碁七十餘局で及其變化更に進ん
黑白の大勢に至る 三百圖に解剖 精密に詳解し圍碁兵法の要領
迄古今未曾有 を極めて親切平易に明示せる
活定石なり、圍碁互先布石攻合法と具備せば百戰百勝疑なし
名人本因坊秀榮 同秀哉 准名人巖崎健造 中川方圓社長棋伯講評

朝報社版 碁戰 和裝美本各二百餘頁 定價金壹圓 送料各十錢（第三近刊）
五段 鈴木爲次郎先生著 （初段實力試驗の難問題） 碁聖（圍碁聖）なり

四版 新撰圍碁全集 上和裝新綺美本 紙價全二冊壹圓 送料八錢
旭將軍の實驗上より優秀に亞る定石、布石、詰物、從分、打碁等圍碁百般に亘る棋譜に對し其利害得失を嚴密明快に細說せる新道實力養成書

忽三版 新撰圍碁定石講話 定價金壹圓五拾錢 送料四拾錢
名人本因坊秀哉氏と旭將軍の對戰に於て好成績を擧げ新界を靈駿せる定評高き第一步より說明せる新界の定石

再版 碁圖中の定石 定價金壹圓五拾錢 送料四拾錢
唯一無二の創案定石は中央の置石許りを保持する六目以上のみ
旭將軍の珍書なれば何人も本書を熟讀研究せば必勝疑なし

大家撰定 寫碁錄 寫碁用紙 定價金壹圓 送料大錢
高橋棋伯發明 圍碁聯珠 棋語便覽 一名碁經 定價金壹圓 送料拾錢

小野名人校閱 天野宗歩師 渡瀨六段原作 四版 將棋必勝法 和裝美本 定價金壹圓 送料拾錢
新刊 大名家人詰將棋妙手選 小野名人校閱 將棋新報社編輯局編 定價金壹圓 送料拾錢
新刊 はじめの手將棋奇謀附中飛車定跡 關根八段校閱 將棋新報社編輯局編 定價金壹圓 送料拾錢
再版 獨習心初將棋速成法 定價金壹圓 送料拾錢

發行所 東京市日本橋區北鞘町十番地 振替東京一二五番 大阪屋號
發行者 東京市神田區南神保町九番地 振替東京二三二七番 模範棋書發行所 斯文館
印刷者 高橋赤次郎 東京市京橋區新榮町四丁目二番地
發行者 武居勝治 東京府荏原郡入新井村新井宿千三百七十九番地
著者 濱井松之助 東京市日本橋區北鞘町十番地
著者 鈴木爲次郎

圍碁寶典第四
定價金六拾錢

著作權所有

大正五年十月五日印刷
大正五年十月十日發行

202
437

發行所 東京市日本橋區北鞘町十番地 振替東京一二五番 大阪屋號
同 東京市神田區南神保町九番地 振替東京二三二七番 模範棋書發行所 斯文館

發行所 東京市日本橋區北鞘町十番地 大阪屋號
發行者 鈴木爲次郎
發行者 濱井松之助
印刷者 高橋赤次郎 東京市京橋區新榮町四丁目二番地